



fig. 259
地割溝遺物出土状況
(東から)

出土遺物

住吉東古墳からは、墳丘上に立て並べられた、円筒埴輪や形象埴輪を始め、大量の遺物が出土した。

須恵器

須恵器は、墳丘くびれ部で出土した墓上祭祀関連遺物と墳丘下の地割溝から出土したもの、それに上部盛土層内の出土遺物とに大別される。

墓上祭祀関連遺物は無蓋高坏と壺形土器で、壺形土器は細かく破碎された状態で出土した。時期は陶邑編年のTK 47型式に相当し、5世紀末から6世紀初頭のものである。

墳丘下の地割溝から出土した須恵器は、土圧により破損しているが、本来は完形で投棄されたものと推定される。時期的には陶邑編年のTK 47型式に相当し、5世紀末から6世紀初頭のものである。

上部盛土層内からの出土遺物は、ほとんどが細片で復元できるものは少ない。時期的には陶邑編年のTK 23型式に相当し、5世紀末のものである。

石製模造品

石製模造品は、埋葬施設の埋土及び上部盛土層内から出土している。埋葬施設の埋土内からは滑石製双孔円盤1点と滑石製白玉約30点が出土している。

上部盛土内からは水洗選別作業によって滑石製双孔円板1点と滑石製白玉約300点が出土した。また、白色の瑪瑙製の勾玉がくびれ部の上部盛土層内から出土している。

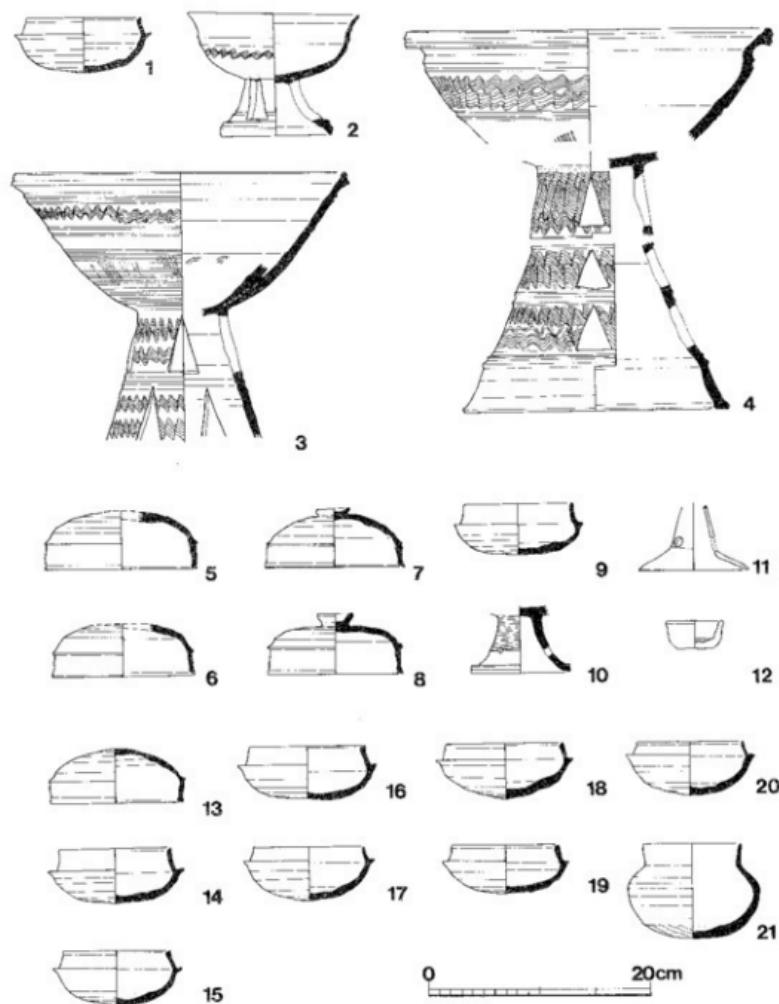
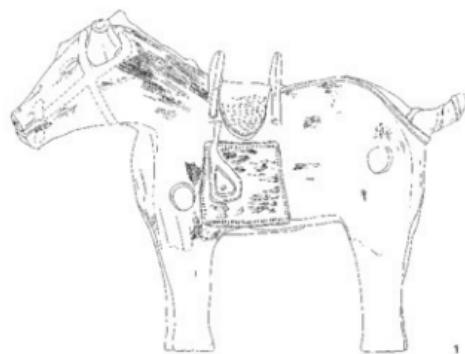


fig. 260 住吉東古墳出土遺物実測図

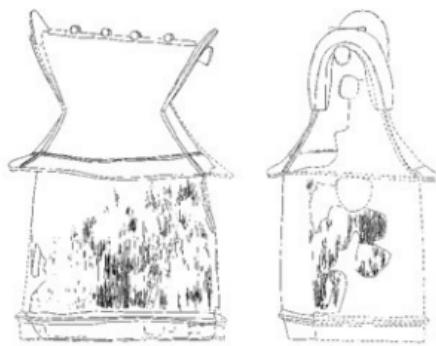
1~4 : 開源

5~12: 盛土内

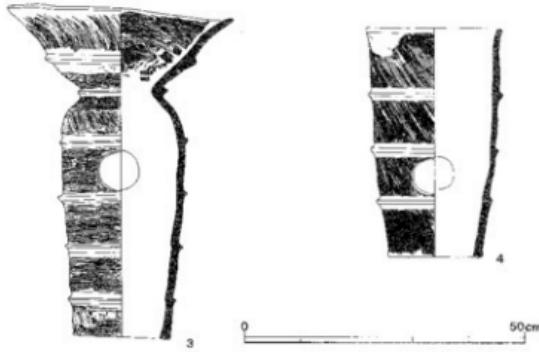
13~21：填丘下区面溝（地割溝）



1



2



3

0 50cm

fig. 261 住吉東古墳出土の埴輪実測図

2号墳

住吉東古墳の東方約20mで発見された方墳である。西側は近世の洪水の際に削られ、北側が調査区域外に延びているため、正確な規模は不明であるが、一辺約15mのものと推定される。墳丘の斜面には、拳大から人頭大の花崗岩の河原石を用いて葺石を葺いている。

古墳は洪水層に覆われているが、周溝内の最下層には暗灰色のシルト層が堆積している。このシルト層からは大量の須恵器や土師器の他に、製塩土器・石製白玉等が出土した。墳丘上面は後世の建物で削平されており、現存高は70cm内外である。

時期 築造時期は周溝内の須恵器が陶邑編年のTK208～TK23型式に相当するもので、5世紀後半の築造と考えられる。



fig. 262
2号墳全景（南から）

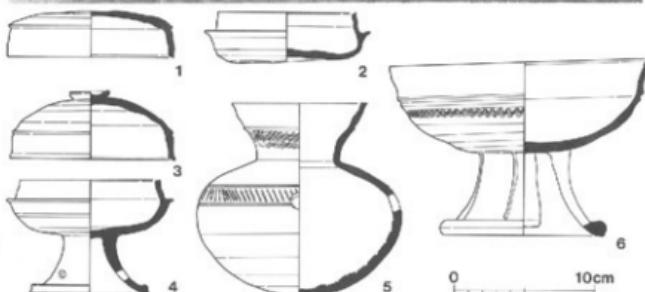


fig. 263
2号墳周溝内須恵器
実測図

3号墳

住吉東古墳の北側約10mで発見された一辺約10mの方墳である。墳丘高約1.1mで、墳丘上には人頭大の花崗岩の河原石による列石を巡らす。墳丘は黄色砂層の地山の上に約50cmの盛土を行って形成されている。主体部は検出されなかった。築造時期は明確でないが、周溝内からは5世紀末から6世紀中頃の須恵器が出土している。

4号墳

3号墳の東側に接し、東古墳の北側に位置する、一辺10m以上の方墳である。墳丘高約1.1mで外部施設は付設されていない。墳丘は黄色砂層の地山の上に約50cmの盛土を行って形成されている。主体部は検出されなかった。築造時期は明確でないが、周溝内からは6世紀中頃の須恵器が出土している。



fig. 264
調査区全景（南から）

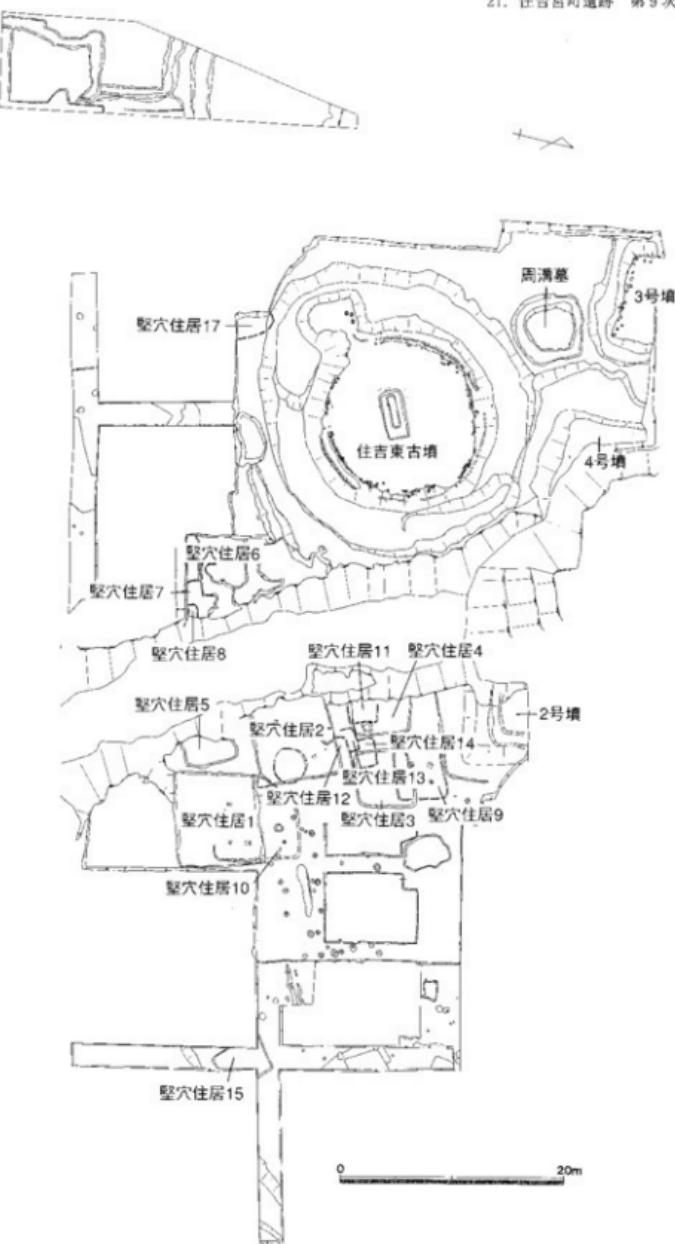


fig. 265
古墳時代遺構
平面図

古墳時代の遺構面は第Ⅰ（上層）・第Ⅱ（下層）の2面の遺構面を検出したが、第Ⅱ遺構面の広がりは調査区の東半部に限定され、西側には認められない。

竪穴住居 第Ⅰ遺構面では10基の竪穴住居が検出されている。どの住居も洪水層の下から検出されているが、床面には多量の遺物を含む暗灰色のシルト層が堆積しており、住居埋没後、洪水までに時間差があったものと推定される。

規模は竪穴住居1が最も大きく、一辺8.5mである。また、当遺跡の竪穴住居には須恵器・土師器などの土器のほか、鉄鎌等の鉄製品や双孔円板・白玉等の石製模造品を出土するものが多い。



fig. 266
2号墳と上層の
竪穴住居群
(北から)

第Ⅱ遺構面 竪穴住居 第Ⅰ遺構面の約20m下の黄色砂層上面の第Ⅱ遺構面（下層）では、7棟の竪穴住居が検出された。このうち、竪穴住居9は上層の竪穴住居3に、竪穴住居10は竪穴住居1にそれぞれ切られている。

時期的には陶邑編年のTK208～TK23型式に相当し、上層がTK23～TK47型式期と考えられる第Ⅰ遺構面との間には、大きな時期差が認められない。第Ⅰ遺構面との間の暗灰色砂層中には、遺物の包含量も多くこの層の成因には、人為的な盛土の可能性もある。

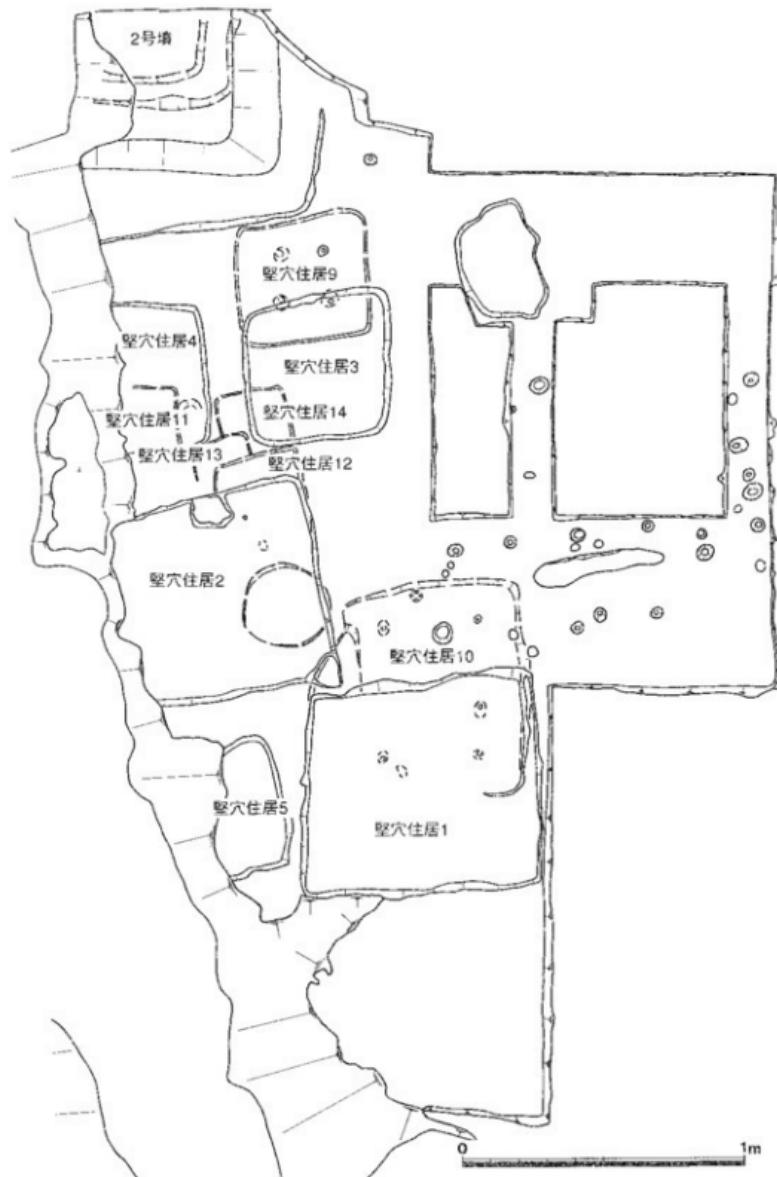


fig. 267 坑穴住居群遺構平面図

第Ⅱトレンチ 道路拡幅に関連して調査を行った第Ⅰトレンチの西側約10mに位置する、幅約8m×長さ30mのトレンチである。層位は第Ⅰトレンチとほぼ同様で、中世の遺物包含層・奈良時代遺構面・古墳時代遺構面を検出した。

奈良時代 当地区では奈良時代と平安時代の遺構が同一面から検出された。奈良時代の遺構としては、土坑2基が検出された。この土坑は不整形で、深さ約20cmと浅い。埋土内には焼土・炭等に混じり、黒色土器・須恵器・土師器等が出土した。

平安時代の遺構は、この土坑を切っている柱穴や溝などがある。柱穴の配置より南北5間×東西2間以上の掘立柱建物が復元できる。



fig. 268
Ⅱトレンチ
平安時代掘立柱建物
(南から)

古墳時代 古墳時代の遺構は、4条の溝が検出された。

SD 01 東西方向の幅2m、深さ30cmの溝で、溝内には洪水による細砂層が堆積していた。溝の肩部から壺蓋で蓋をした壺形土器が正位に据えた状態で出土した。この土器はMT 15型式に相当し、6世紀前半のものと推定される。

SD 02 東西方向から南北方向に屈曲する幅1.5m、深さ30cmの溝である。SD 03に切られることから、6世紀前半のものと推定される。

SD 03 東西方向から南北方向に屈曲する幅1.5m、深さ20cmの溝である。溝内より壺身・壺蓋・壺等が完形の状態で重なり合って出土した。この土器から時期的にはTK 47型式に相当し、6世紀初頭のものと推定される。

SD 04 トレンチの東端で検出された南北方向の溝で西側を SD 02 によって切られている。深さは約 40 cm で埋土内からは、弥生時代末期から古墳時代初頭の土器が出土した。

この 4 条の溝のうち、SD 04 以外は遺物の出土状態や溝の形状から古墳の周溝と推定している。

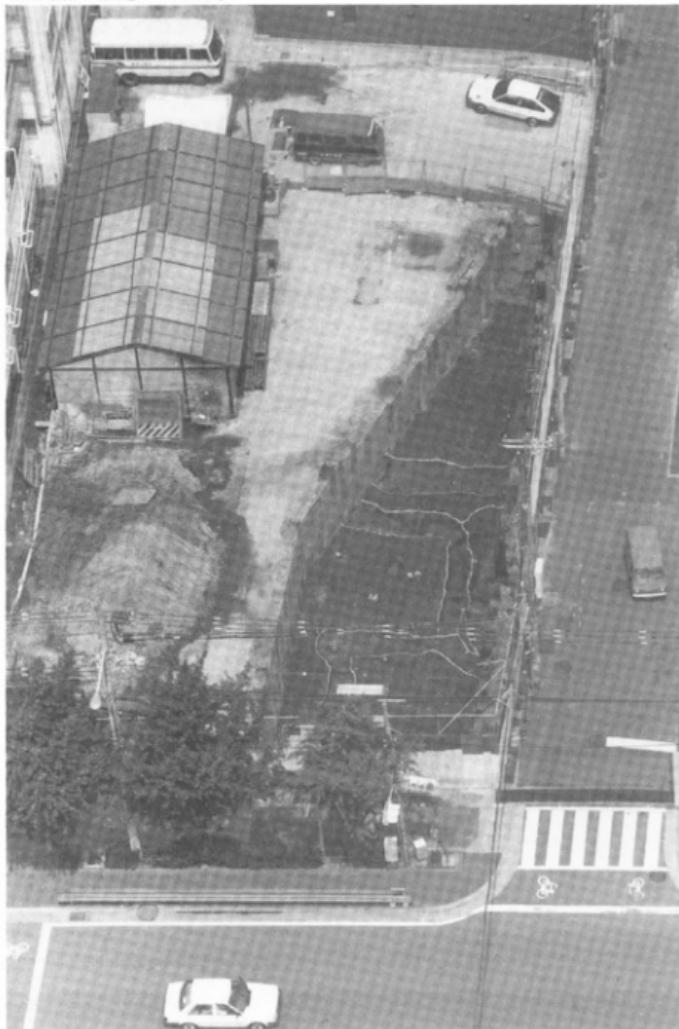


fig. 269
II トレンチ全景
(南から)

3. まとめ

今回の調査では住吉東古墳の発見のほか、新しい事実の発見があった。

まず、住吉東古墳は墳丘の地割から盛土の形成、喪屋の建築、棺の埋葬と、古墳の築造の過程が明確に追える貴重な発見である。喪屋の存在は文献に見られる「殯」の儀式から、当時の葬送儀礼の中で一般的に存在するものと推定されていた。しかし、現在までに喪屋と言われる明確な遺構の発見はなく、今回のものが唯一の発見といえる。この建物は、埋葬施設上に建てられており喪屋のような建物ではないかと考えられる。喪屋との違いは、死者を埋葬するまで安置しておくものが喪屋と考えれば喪屋とは呼べないかもしれない。従来の古墳の調査では、墳丘上面での遺構の検出を重要視しがちであったが、今回の調査事実をみると、古墳築造の各段階で各種の祭祀の存在が明らかである。

また、埴輪も樹立当時の状態を良く残し、県下でも数少ない馬形埴輪や人物埴輪などが出土した。

古墳の分布状況についても、当古墳群は住吉東古墳のような帆立貝式古墳や前方後円墳を中心となり、その周りに低墳丘で小規模な方墳が群集するものと推定され、大阪市平野区から八尾市にまたがる、長原古墳群と近似する。

古墳とほぼ同時期と推定される堅穴住居群とは、接近して立地しており、他に類例を見ないものである。古墳時代の多くの遺跡では、墓域と住居域とが重なりあうという事例はない。また、当遺跡で発見された堅穴住居には、通常の住居では珍しい、石製模造品や鉄製品などが多く認められる。

この堅穴住居群が、通常の一般的な集落の一部か、古墳築造に関連する特殊な集落かは、現状のところ明らかにすることはできない。

すみよしみやまち
22. 住吉宮町遺跡 第11次調査

1. はじめに

11次調査地点は、遺跡の発見の契機となった第1次調査地点と、国道2号線を隔てて南東50mに位置する。今回、ここでビル建設工事が計画されたため、試掘調査を実施したところ、遺構の存在が確認されたため、工事によって破損のうける部分を対象に調査に着手した。

2. 調査の概要

調査地は工場跡地で、地区内は建物基礎による擾乱が著しかったが、5面存在した遺構面のうち第2遺構面まで擾乱の大部分は留まっている。それ以下のものについては、比較的良好な状態で遺構を検出することができた。

第1遺構面

現代の盛土下に近世の水田土壤がひろがる。その下には、六甲山南麓の大部分の地域にみられる土石流が存在した。その堆積中には一辺1.5m前後の花崗岩が点在する。その花崗岩を石材として搬出するために、矢鉄によって割り採った、いわゆる採石址が存在した。残された石塊には矢穴が残され、抜き取った跡の窪みには石屑が堆積していた。この採石の時期はわずかに出土した備前焼の攝鉢片から15~16世紀と推定される。

fig. 270
調査地位置図
1 : 2500



第2遺構面 この遺構面では掘立柱建物2棟が検出されている。

SB 01 SB 01-1は梁行4間(8.5m)桁行5間以上(12.5m)の掘立柱建物である。主軸は真北から東へ82°振った、ほぼ東西方向の建物である。桁方向の北から2列目と4列目の柱列は補修をしたらしく、全て柱根を抜き取り、河原石ないしは須恵器・灰釉山茶焼・黒色土器などで埋め戻し、礎盤としている。また、中央の柱列でも2本の柱根が抜き取られ、石が据え置かれていた。この建物は11世紀中葉に補修されたものと考えられる。

SB 01-2は梁行1間(4.0m)桁行4間以上(10.0m)の掘立柱建物である。主軸は真北から東へ79°振った、ほぼ東西方向の建物である。桁方向の南側の柱列では、東南隅からひとつおきに礎盤にしたと考えられる河原石が置かれていた。この建物は、柱穴内から出土した土器から10世紀後半と考えられる。

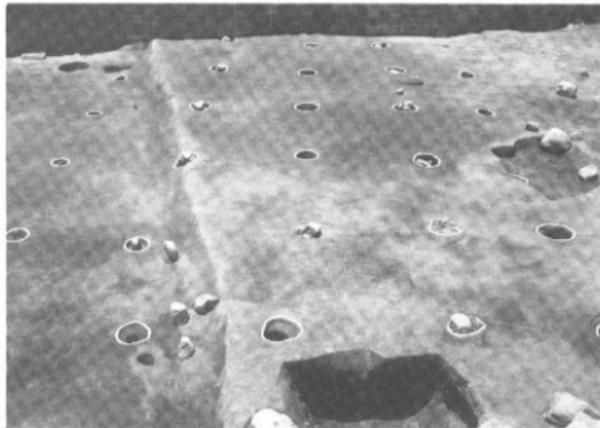


fig. 271 第2遺構面 SB 01-1 (東から)

第3遺構面 この遺構面の遺構は調査区の西方に広がるらしく、調査区の西端で3棟の掘立柱建物とそれに伴うと考えられる地鎮遺構2ヶ所を検出している。

SB 02 SB 02は南北3間(5.2m)で東西は1間分のみ検出しており、全体の規模は不明である。柱穴の掘形は70~90cmの隅円方形である。

SB 03 SB 03は南北3間(5.0m)で東西は1間分のみ検出しており、全体の規模は不明である。柱穴の掘形は60~80cmの隅円方形である。

SB 04 SB 04は南北3間(5.5m)で東西は1間分のみ検出しており、全体の規模は不明である。柱穴の掘形は50~80cmの隅円方形である。

これらSB 02～04の掘立柱建物の方位は、それぞれ真北から西へ14°(SB 02)、15°(SB 03)、12°(SB 04)となり、その配置とともにかなり規格性の高い建物群の一部と考えられる。

地鎮 地鎮遺構と考えられるSX 01・04は、SB 03・04のそれぞれ東南隅からわずかに離れた同じような位置に存在する。SX 01は浅い楕円形の土坑に小型の土師器壺を一列に7個体並べ、土師器壺2個体で蓋をするように置かれていた。SX 04は土坑のなかに須恵器壺を正立させ、土師器壺2個体が重ねて伏せ置かれていた。

時期 この遺構面の時期は、SX 01・04の遺物から9世紀後半から10世紀前半にかけてのものと考えられる。



fig. 272
第3遺構面
SB 03(東から)



fig. 273
第3遺構面地鎮遺構
SX 01(北から)

- 第4遺構面 この遺構面では、調査区の南西隅で4棟の竪穴住居を検出している。
- SB 05 SB 05-1は一辺6m程度、SB 05-2は一辺7m程度の方形の竪穴住居である。この2棟の竪穴住居は建て替えと考えられるが、残存状態の悪さから、先後関係は明らかにできなかった。
- SB 06 SB 06-1は一辺5.5m前後、SB 06-2は一辺6.5m程度の方形の竪穴住居である。この2棟の竪穴住居も建て替えと考えられるが、残存状態の悪さから、先後関係は明らかにできなかった。
- 時期 SB 05・06の築造は、その出土遺物から6世紀後半と考えられる。



fig. 274
第4遺構面
SB 06-1・2
(北から)

- 第5遺構面 この遺構面では、調査区北半で6棟の竪穴住居を検出している。
- SB 07 SB 07は 3.5×4.0 mの方形の竪穴住居で、柱穴は2本である。時期は弥生時代後期末である。
- SB 08 SB 08は 4.0×4.4 mの方形の竪穴住居であるが、柱穴は確認できなかった。時期は弥生時代後期末である。
- SB 09 SB 09は 4.6×5.6 mの方形の竪穴住居で、柱穴は3本検出したがその配置から本来は4本であったと考えられる。時期は弥生時代中期中葉である。
- SB 10 SB 10は 5.5×7.5 mの長方形の竪穴住居で、柱穴は1本を確認したに留まる。時期は古墳時代前期（布留式併行期）である。
- SB 11 SB 11は一辺8m前後の隅円方形の竪穴住居（SB 11-2）の中に、先行すると考えられる一辺5m前後の隅円方形の竪穴住居（SB 11-1）が存在する。時期はいざれも庄内式から布留式併行期のものである。
- SB 12 SB 12は径6m程度の円形竪穴住居であったと考えられるが、大部分は河道によって削平されている。時期は弥生時代中期前半である。

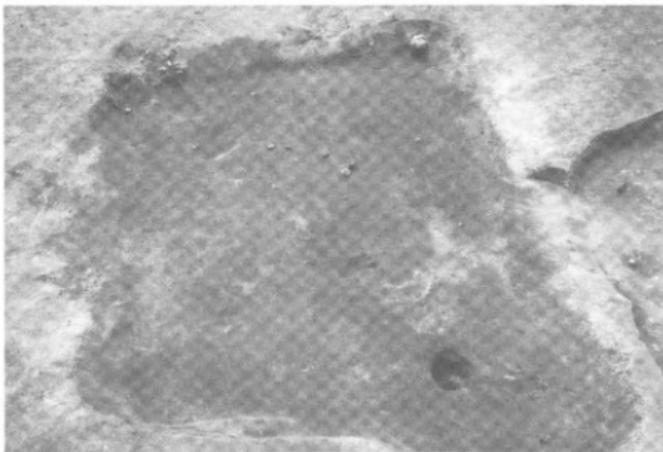
fig. 275
第5遺構面全景
(南から)



fig. 276
第5遺構面
SB 07 (東から)



fig. 277
第5遺構面
SB 10 (北から)



地震跡 第2～3遺構面上で、調査区全域に多数のひび割れを検出した。寒川旭
(噴砂) 氏の現地調査によって地震跡(噴砂)であることが判明した。第1遺構面
の精査時には噴砂を確認していないので、どの遺構面が地表の時に起きた
かは確定できないが、1596(慶長元)年に京都から神戸にかけて起きた伏
見地震によるものと推定されている。



fig. 278
噴砂遺構断面・平面
(北から)

3.まとめ

今回の調査地では、前述のように弥生時代から室町時代に至るまでの遺構・遺物が出土した。中でも11世紀中葉の掘立柱建物(SB01-1)の補修跡及びその柱穴内から出土した各種の遺物が注目される。この補修跡は、柱の最も腐朽し易い地中から地上へ出た部分あたりで切り離し、石や土器片などで礎石建物様にしたものである。これまで市内でも幾例かが確認されている。また、これら補修に用いられた土器片には、東播系須恵器・灰釉陶器・黒色土器・白磁があり、各地域間の編年を考える上で良好な資料である。

第3遺構面の地鎮遺構2ヶ所(SX01・04)は、今後の類例増加を待たなければならぬが、掘立柱建物に付随するかたちで穿たれた土坑において、とり行われた祭式の痕跡であろう。大地に穿たれた穴は、土地そのものを鎮めるためのまつりに使われたと考えられる。

(詳細は 神戸市教育委員会『住吉宮町遺跡 第11次調査』1990 を参照)

おうごなかむら
23. 淡河中村遺跡

1. はじめに

土地改良事業（圃場整備事業）に伴い、埋蔵文化財の試掘調査を昭和63年5月・7月に実施した。その結果、平安時代～鎌倉時代のピットや溝などが検出された。

今年度は、土地改良事業によって包含層および造構面に工事の影響がおよぶ道路・排水路部分について発掘調査を行った。

淡河町は周囲を山に囲まれた、東西約4km、南北約600mの小盆地からなる。中央部には淡河川が蛇行し、志染川から美嚢川、そして加古川へと注いでいる。

淡河町には、淡河城をはじめ天正寺城・萩原城が、盆地を囲むように点在している。昭和51年の淡河城址の発掘調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居が検出されている。昭和54年の萩原遺跡の発掘調査では、鎌倉時代前半の掘立柱建物3棟が検出されている。また、南僧尾では、縄文時代の石鍬が採集されている。



2. 調査の概要

調査は、水田の段に応じて、便宜的に南からA・B・C地区を設定した。現代耕土・床土は重機により掘削し、以下は人力により調査を行った。

基本層序

基本層序は、耕土、床土、暗青灰色シルト（I）、灰褐色シルト（II）の平安時代～鎌倉時代の遺物包含層、黒色粘土（III）の古墳時代の遺物包含層、地山となる。III層はA地区のみに存在するが、他は、両地区とも厚さに相違はあるものの、ほぼ全体的にI、II層が存在する。

A地区

A地区は南半部約18mは耕土下に一部遺物包含層が存在するのみで、すぐ地山となっている。そこから北半は、地山がそのまま幅約17mにわたってゆるく谷状に落ち込んでおり、I・II・III層および遺構はこの間で検出されている。遺物包含層では、I・II層からは平安時代～鎌倉時代の須恵器・土師器・磁器などが、III層からは古墳時代の須恵器や土師器が出土している。遺構は、谷状地形の南側の斜面で、井戸2基（SE 01・02）を検出した。

SE 01

直径約1.4m、深さ約80cmの円形の掘形を地表面（凝灰質砂岩）に穿ち、底に約20cmの厚さで暗灰色粘土を敷いたのちに、一辺約50cmの板材を用いてコの字形の枠組みをつくり、その上部に高さ約60cmにわたって河原石を用いて井戸側を組んでいる。基底部は、まず底のほぼ中央に東西方向に長さ78cm、幅17cm、厚さ5.5cmの両端を斜めに削る板を、切り欠いた部分を石で支えて据える。対する南側は、地山の斜面のわずかの段を利用して、それらの上に長さ70～80cm、幅7～14cm、厚さ2～3cm



fig. 280 SE 01・02 (東から)

の板材を互い違いに組んでいる。組まれた板の上に沿うように 20 ~ 40 cm 大の河原石を方形に組んでおり、上面で一辺約 80 cm、基底部で一辺約 50 cm である。板材・石ともに遺存しておらず、井戸内に落ち込んでいる板材片・石がそれにあたると考えられるが、地山面を利用し、特に石組などを行わなかったと考えられる。井戸内からは須恵器片、土師器片、木片の他に板組みの間から柄杓の底板と思われる円形曲物片が出土している。廃棄にあたっては、井戸内に徐々に上が堆積したのち拳大の石で丁寧に埋めている。



fig. 281 SE 01
埋没状況（東から）

SE 02 長径約 2.3 m、短径約 1.9 m、深さ約 80 cm の楕円形の掘形を地山面に穿ち、10 ~ 20 cm 大の河原石や自然木を用いて径約 0.6 m の円形に基底部をつくり、その上に河原石や板材を用いて井戸側を構築している。西側は 40 cm 前後の比較的大型の河原石を、その両側に 10 ~ 20 cm 大の河原石を用いて壁をつくり、南東側には長さ 61 cm、幅が上端で 10 cm、下端で 14 cm、厚さが上端で 2.5 cm、下端で 5 cm の板を立て、北側には長さ 40 cm、幅が上端で 13 cm、下端で 18 cm、厚さが上端で 3 cm、下端で 4.5 cm の荒く削られた板を立てて井戸側としている。残りの東側、つまり上記の板と板の間には、石組や板材がみられず、廃棄の際にとりはずされたのかもしれない。掘形を掘削した際の地山の土を用いて壁をつくっている。井戸側は、上面で長径約 70 cm、短径約 60 cm の楕円形で、壁がほぼ垂直に落ちる断面四角形である。

井戸底には 20 cm 大の平坦面のある河原石が 6 個敷かれている。井戸内

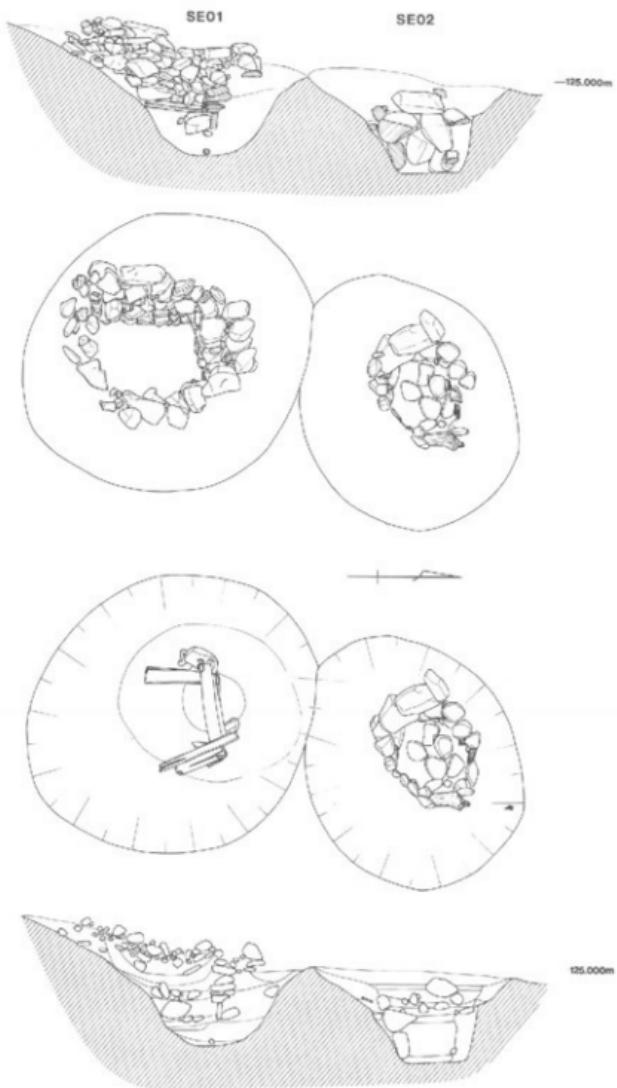


fig. 282 SE 01・02
実測図

からは、底よりわずかに上面で須恵器塊、皿や甕片、土師器羽釜、木製錘（いわゆる槌の子）、箸状木製品や木片の他、種子などがまとめて出土している。廃棄にあたっては、井戸内を茶灰色粘土で埋めたのち、10～20cm大の河原石で埋めている。また、廃棄の際の祭祀に使用したと思われる完形の須恵器塊と土師器皿がそれぞれ1点、井戸側肩部付近で出土している。

時期 2基の井戸から出土している遺物には大きな時期差はみられず、12世紀前半を中心と想定していられる。



fig. 283 SE 02
遺物検出状況
(西から)

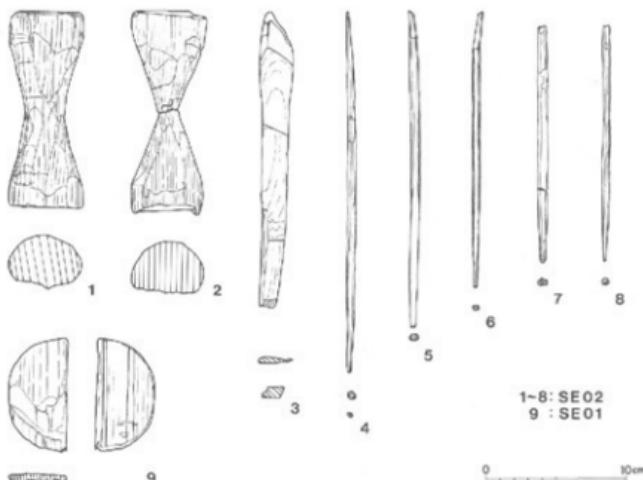


fig. 284
井戸内出土
木製品実測図

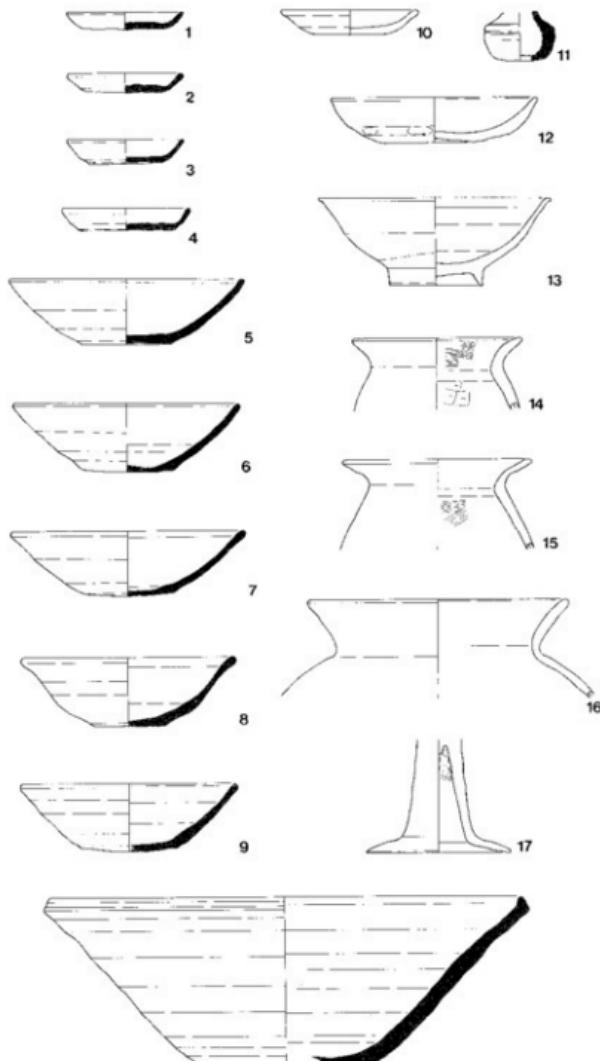


fig. 285 遺物実測図

0 10cm

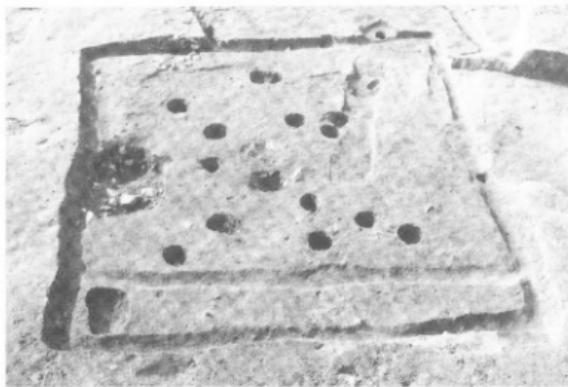
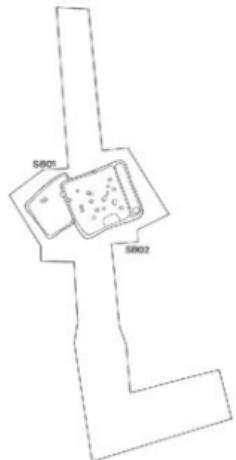


fig. 286 SB 02 全景（東から）

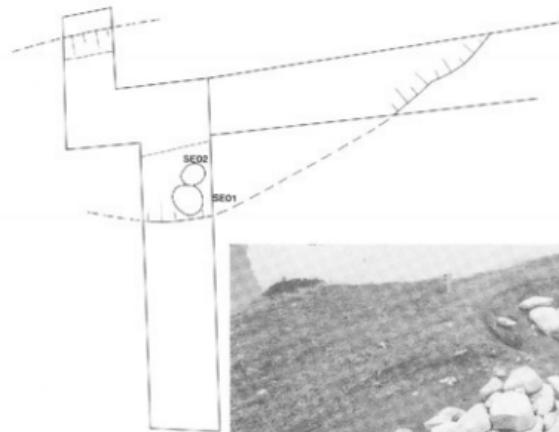


fig. 287 A + B 地区遺構図



fig. 288 SE 01・02 近景（南から）

B地区

B地区では、竪穴住居2棟(SB01・02)が検出されている。遺物包含層では、I層から平安時代～鎌倉時代の須恵器・土師器・磁器などが出土している。なお、これらの竪穴住居は当初調査区中央付近で切り合ったそれぞれ半分が検出されたため、全体を明らかにするために、東側を26.5m²、西側を34m²拡張を行った。

SB01 一辺4.4×4.0mの方形の竪穴住居である。南東部がSB02によって切られているが、周囲に幅10～20cm、深さ10cmの周壁溝が巡る。住居

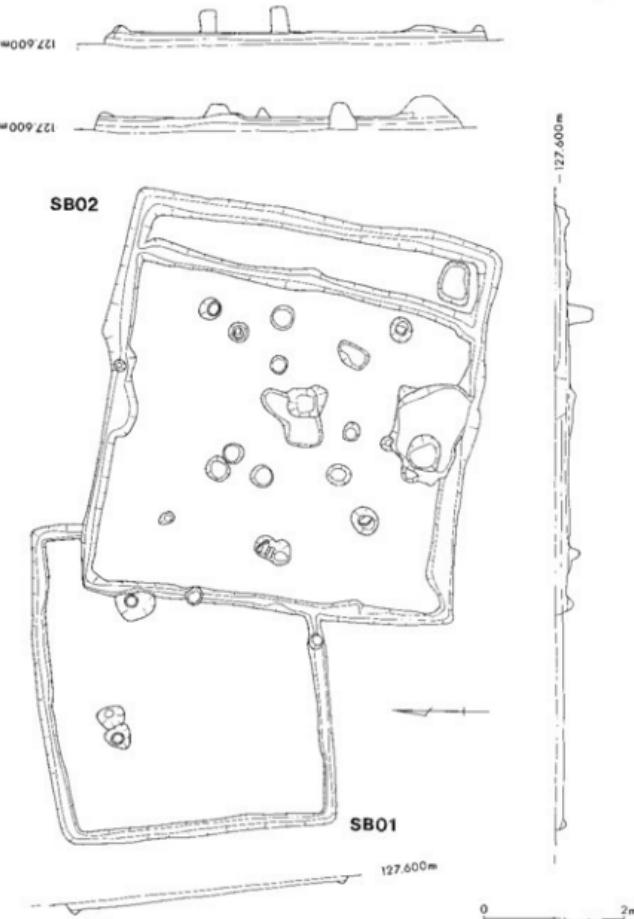


fig. 289
SB01・02 実測図

内では、北半部で柱穴が3個検出されているのみで、柱の配置は明確ではない。遺物としては、土器は土師器片ばかりで、須恵器は含まない。また、北側中央付近から刀子とみられる鉄製品と周壁溝北東部で釘が出土している。

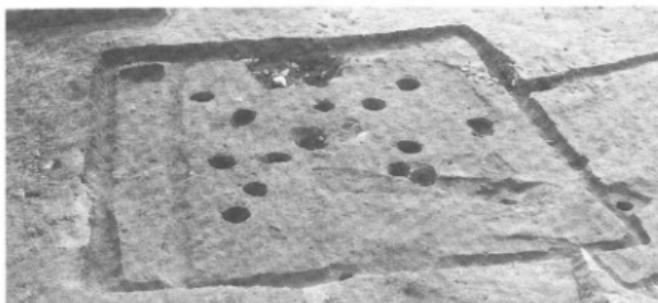


fig. 290 SB 02
全景（北から）

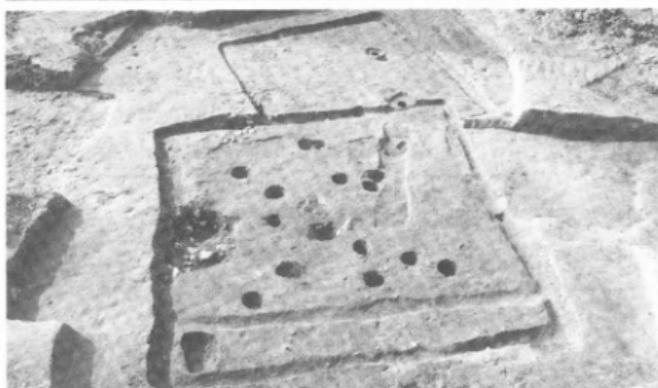


fig. 291 SB 01・02
全景（東から）

SB 02 一辺 4.2×5.2 m の方形の竪穴住居で、のちに東側を約 1 m 拡張している。周囲には拡張前後とともに、幅 10 ~ 20 cm、深さ 10 ~ 20 cm の周壁溝が巡る。住居内では柱穴が 15 個検出されているが、このうち内側の 4 本が拡張前、その外側の 4 本が拡張後の柱であると考えられる。中央には 50×80 cm の不整形なピットがあり、南壁中央付近の壁に接して 1.0×1.4 m のやや歪な土坑（SK 01）が穿たれている。SK 01 からは土器が多く出土しており、貯蔵穴と考えられる。遺物としては、土師器片が多く出土している。いずれの住居からも土器の細片が多く出土しているが、遺存状態が良いものとはいえない。詳細な時期の確定はしがたいが、いずれも布留式併行期の中に収まるものと考えられよう。

- C地区 C地区では、柱穴群と溝4条が検出されている。遺物包含層では、I・II層から鎌倉時代の須恵器や土師器などが出土している。
- 柱穴群 調査地区南端付近で計18基検出されている。建物等を構成するような配置は認められず、性格は不明である。柱穴内からは若干の遺物が出上しているが、いずれも細片ばかりである。詳細な時期の確定はしがたいが、鎌倉時代を中心とする時期であろうと考えられる。
- 溝 調査地区中央付近から南へ約30mの範囲内に、ほぼ東西方向に平行して4条検出されている。南と北の2条は、幅約1.5m、深さ約15cm、間の2条は、幅約70cm、深さは北側が20cm、南側が10cmである。溝内から遺物は全く検出されておらず、時期の確定はしがたいが、上面の包含層の遺物からみて鎌倉時代頃のものと考えられる。

3.まとめ 今回の調査での明確な遺構は、布留式併行期の竪穴住居2棟と12世紀代の井戸2基であった。竪穴住居については、本調査地から南東約500mに位置する淡河城址の発掘調査で、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居が検出されていることからも、付近一帯に弥生時代末～古墳時代前期の集落の存在が予想される。また、中世の遺構としては2基の井戸のみであったが、井戸内遺物からみても日常生活用具が多く投棄されており、これらの井戸を伴う12世紀代の建物なし集落の存在が予想される。包含層出土遺物では、弥生時代末～古墳時代、平安時代～室町時代のものが出土しており、一時断続があるものの弥生時代から中世にかけて営々と生活の痕跡をたどることができよう。

かみおなだ
24. 上小名田遺跡

1. はじめに

上小名田遺跡の調査は、昭和61年度に試掘調査を行い、昨年度より本調査を実施してきた。

昨年度は5地区、計2,940m²の発掘調査を行い、平安時代中期から鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物9棟、土坑22基、溝12条、河道などが検出された。今年度調査地区は、昨年度調査のV区に連続する北側および高圧線鉄塔新設部分である。

昨年度同様、調査地区名は調査順に付し、本線地区をVI・IX区、鉄塔新設部分をVII区とする。なお、VII区は三木・三田線歩道設置にかかる当遺跡の調査区である。



2. 調査の概要 今回の調査では、前回調査で検出した一部を含め掘立柱建物 13 棟（VI 区 12 棟・IX 区 1 棟）、土坑 12 基、木棺墓 1 基のほか、溝、河道が検出された。

掘立柱建物 掘立柱建物は VI 区、IX 区で検出されており、昨年度調査の V 区と合わせると、南北約 50 m、東西約 90 m の範囲に 17 棟の建物が集中している。これらの建物は、10 世紀後半から 12 世紀のものである。VI 区、IX 区で検出された建物のそれぞれの時期は確定できていないが、SB 01・03・20 は 10 世紀後半に、ほかの建物は 11 世紀から 12 世紀のものである。なお、現時点では掘立柱建物のものとして確認できていない柱穴が多数あり、今後の検討によって建物棟数の増える可能性がある。



fig. 203 VI区遺構平面図

V区-SB 01 昨年度検出された建物の続きで、東に廊がつく 3間×7間の南北棟建物で、規模は、 16.2×7.2 mである。

SB 03・04 この建物は 9間×4間の四面廊南北棟建物で、ほぼ同位置で建て替えが行われている。建て替え後はわずかに東に振っており、柱掘形のいくつかは重複している。規模は、 21.6×9.5 mである。

SB 20 東廊のつく 5間×3間の南北棟建物で、 12.8×7.4 mの規模である。

これら 9棟の建物は、いずれも総柱で 11世紀から 12世紀のもので、建物間の切り合いが見られる。建物規模については、下記のとおりであるが、1棟を除きいずれも 4間×3間以上の規模であり、柱掘形は円形で、径 30～50 cmである。

地鎮 8間×5間 (19.5×13.0 m) と当遺跡では最大規模の建物である SB 16は、建築時の地鎮と考えられる柱掘形底への銅銭埋納が行われており、特筆される。銅銭が出土した柱穴は 8カ所で、いずれも柱掘形底の柱底部分にあたる所より検出され、建築時に柱を据える前に埋納したことは明らかである。それぞれの柱穴の銅銭埋納数は 1～5枚で、計 22枚が出土した。銅銭はすべて乾元大寶（皇朝十二銭・初鑄 958年）である。



fig. 294 VI区全景（西から）（空中写真）

- 建物規模 SB 10 3間×2間以上 (7.5 m × 4.6 m) 柱掘形径15cmと小規模
 SB 11 5間×2間以上 (8.4 m × 4.0 m以上)
 SB 12 5間×2間以上 (10.7 m × ? m)
 SB 14 4間×4間 (10.0 m × 9.0 m) 柱根残存
 SB 15 3間×3間 (7.9 m × 7.1 m)
 SB 16 8間×5間 (19.5 m × 13.0 m) 柱掘形内に乾元大寶埋納
 SB 17 4間×4間 (11.2 m × 9.2 m)
 SB 18 4間×4間 (10.0 m × 9.4 m)
 SB 19 4間×3間 (9.1 m × 8.7 m)



fig. 295
VI区主要造構
配置図

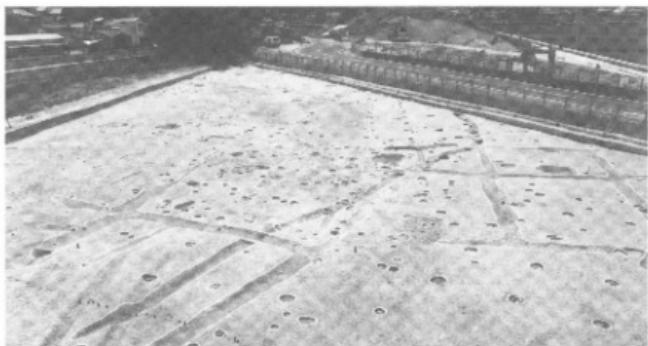


fig. 296 VI区中央部
(北から)



fig. 297 SB16・17・18
(南から)

建物方位

これらの建物はすべて南北棟であり、10世紀後半と考えられるSB01・03・04・20は、ほぼ同方位に建てられている。また、その他の建物は方位をやや東に振る共通性があり、時期差による方位の違いが見られる。

また、建物構造においても、前者は廂がつく建物で、後者は総柱建物がほとんどであるという違いが見られる。

各建物の時期については出土遺物の整理等、今後の検討が必要であるが、SB03については、建築時期は初鎌年958年の乾元大寶の時期以降であり、廃棄された時期は柱掘形内の柱部に入れたと思われる状況で出土した須恵器塊より11世紀半ばと考えられる。このことから11世紀前半期に存在していたと推定される。また、柱掘形の切り合い関係からSB16→SB17→SB18と新しくなることが明らかである。

土坑

52基検出された土坑のうち特徴的に見られるのは、直径1.5m前後、深さ約50cmの円形もしくは隅円方形土坑で、土坑内に拳大から人頭大の石を多數入れているものである（SK 602・609・619・621・625・626、SX 603等）。これらの土坑には、須恵器塊などの土器も石と一緒に入れられているものもある。また、石には火を受けた痕跡のあるものもある。

これらの土坑は、その使用が終わった後に石、土器等を廃棄して埋めたものか、石をいれたままの状態であったのか、あるいはそれらの廃棄が土坑の使用目的を示すのかは明らかでなく、用途は不明である。

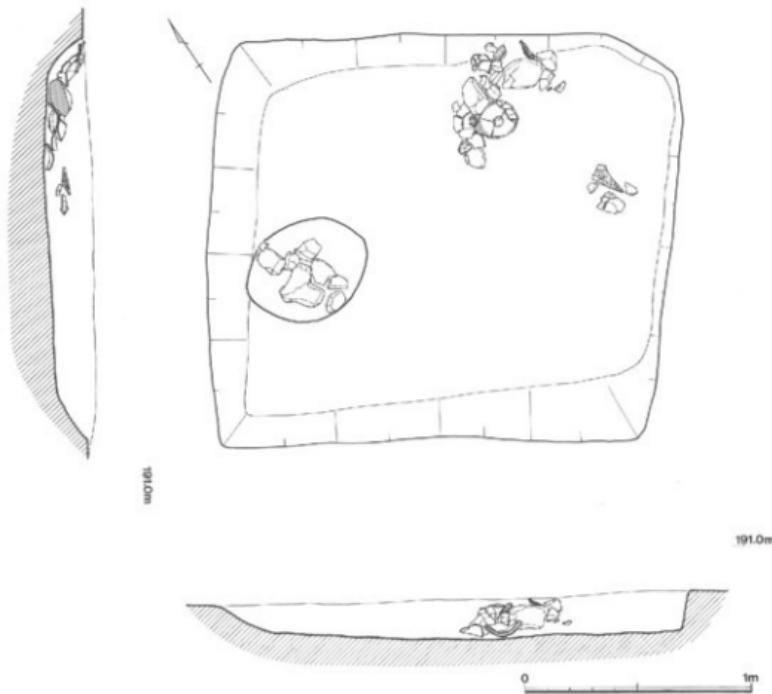


fig. 298 SK 607 平面・立面図



fig. 299 SK 617
土器出土状況
(南から)

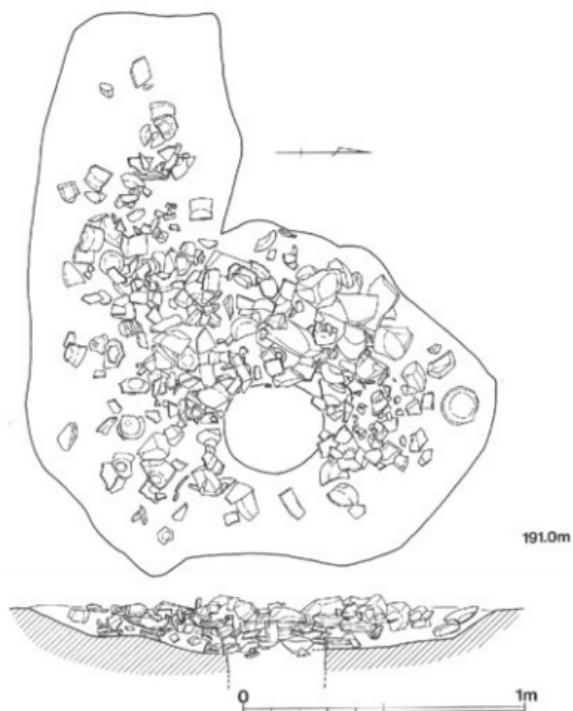


fig. 300 SK 617
平面・立面図

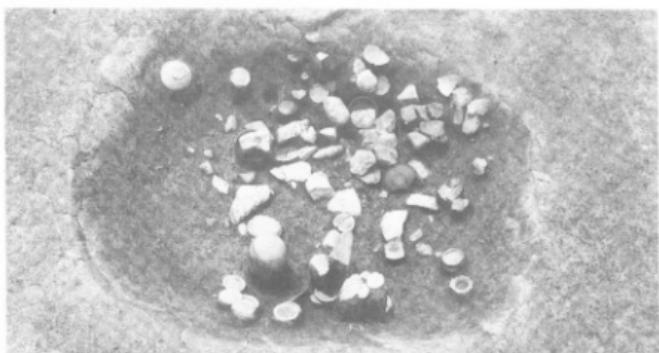
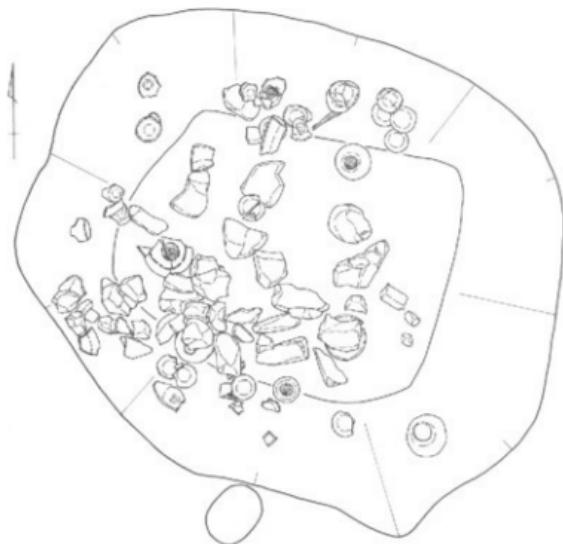


fig. 301 SK 636
全景(北から)



191.0m

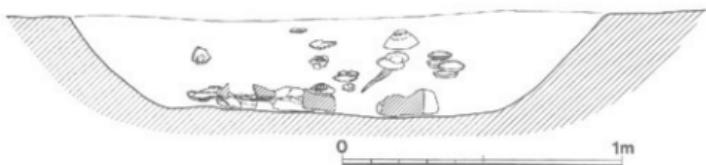


fig. 302
SK 636
平面・立面図

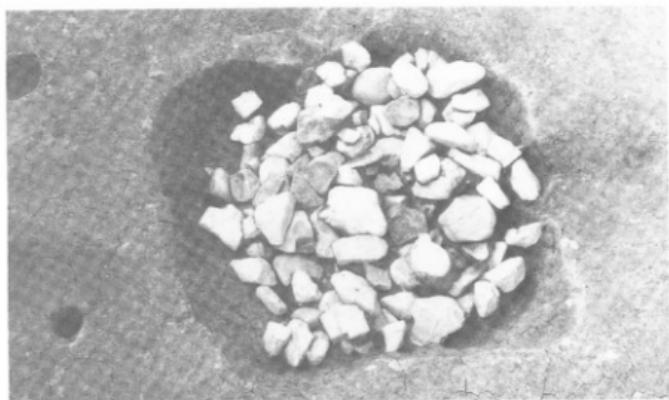


fig. 303 SK 625
近景（東から）

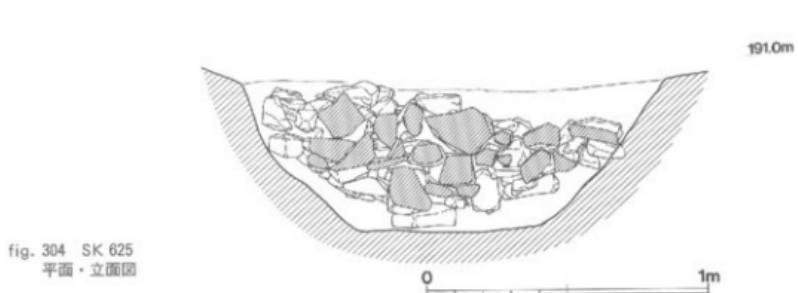


fig. 304 SK 625
平面・立面図

溝 (SD 601) SB 06・07 の北側に田の字状に南北 4 条、東西 3 条が交差するような形でつくられており、出土遺物から 10 世紀後半に属すると考えられる。溝の幅 50~80cm、深さ 20cm 前後と浅い。この溝に囲まれたなかには、同時期の遺構はなく、溝の方向や位置、あるいは時期から見れば、掘立柱建物の SB 06・07 と何らかの関連があると思われるが、用途については明らかでない。

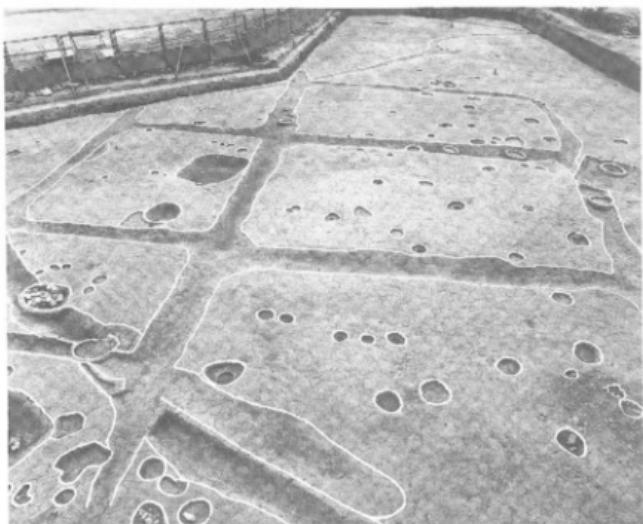


fig. 305 SD 601
(西半) (東から)

IX 区 - SB 23 6 間 × 4 間の総柱建物で、北・西・南の三面に建物を取り巻くコ字形の溝が設けられている。この溝は、幅約 80 cm、深さ 15 cm 前後で、建物の側柱に接するように巡っている。



fig. 306 IX 区 SB 14
(南から)

**木棺墓
(ST 01)** IX区で検出された長さ 185 cm、幅 60 cmの長方形の土壙で、検出時には長さ 185 cm、幅 65 cmの範囲で蓋板の木質が残存していた。底板も木質が残存していたが、側板は不明瞭で小口板は確認されなかった。また、深さは 10 cmと非常に浅く、削平されている恐れもあるが、蓋板の残存状況からみて木棺墓と考えるのに疑問が残る部分もある。出土遺物は、土坑底より刀子と思われる鉄製品 1 点がある。このため、時期については不詳であるが、IX区 - SB 01 と方向がほぼ一致し、柱間に位置することからこの建物との関連も考えられる。

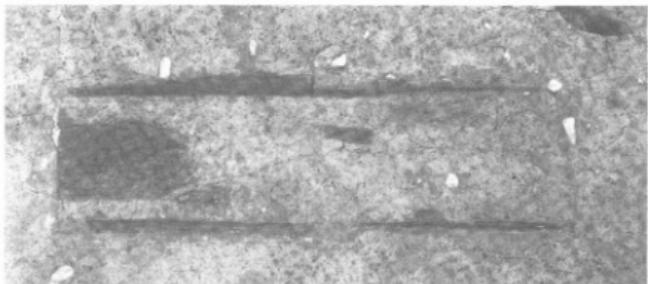


fig. 307 IX区 ST 01
蓋板除去後
(西から)

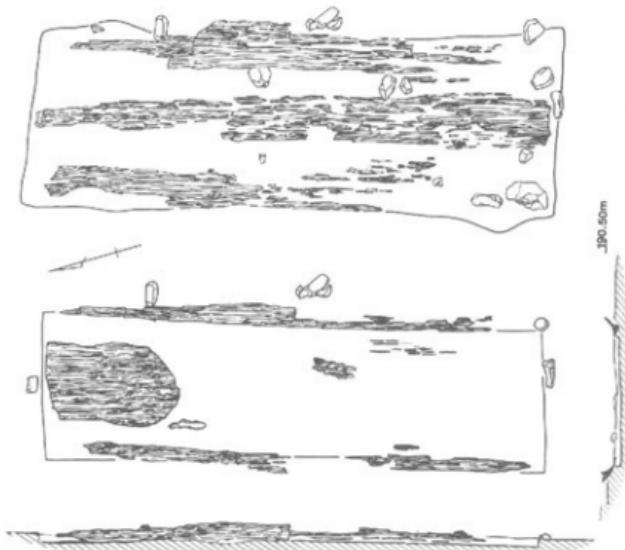


fig. 308 ST 01
平面・立面図

河道 VI区南端部でV区から続き、VII区西半で昨年度調査 I～IV区で検出されたものに続くと考えられる河道が1条検出された。この河道は、現八多川の旧流路（近世以降埋没）に続いていたものと考えられる。

VIII区では、この河道以外に北東部のV区よりで、ピットが数ヶ所あるだけで、建物等の遺構は検出されなかった。

出土遺物 今回の調査で出土した遺物は、土器類では、須恵器・土師器・黒色土器の日常雑器のほか、縁釉陶器・灰釉陶器の施釉陶器、青磁・白磁などがある。その他に乾元大寶などの銅錢、鉄滓などが出土した。

これらのうち、遺物包含層からの出土ではあるが、花紋を陰刻した縁釉陶器の香炉蓋片や、腰帶の飾りである石帶が出土しており注目される。



fig. 309
遺物包含層出土遺物実測図

3.まとめ

今回の調査で新たに11棟の掘立柱建物と昨年度一部調査した建物址2棟の規模が確認された。これまでの調査で明らかになったことをまとめると、

I. 平安時代中葉（10世紀）から後葉（12世紀）にわたる建物がほぼ継続して営まれている。また、9世紀の遺物も出土していることから、この頃まで遡る遺構の存在が考えられる。

II. 平安時代中葉（10世紀）の建物については、県下では初めて確認された四面廂建物など比較的大きな建物が見られる。それ以降の建物址においてもSB 16のように市内でも最大規模の掘立柱建物があるなど、一般集落とは異なる様相を示している。

また、遺物においても石帶や県内では初出土の陰刻花紋を施す縁釉陶器の香炉蓋片などの施釉陶器・石帶などの出土遺物からみて、これらの建物群はこの地域の有力者の居館である可能性が高い。

III. 今回の調査区域のVII区では、自然河道が検出され建物等の遺構が存在しないことが明らかになり、昨年度の調査結果と合わせ、ほぼこの建物群の南限がおさえられた。来年度調査により、IV区で検出された建物とのつながりや、各時期による建物の拡張あるいは配置について明らかになるとを考えられる。

いなりじんごううらやま
25. ショブ谷遺跡・稻荷神社裏山古墳群

1. はじめに

武庫川の支流である有馬川と船坂川に挟まれた丘陵においてゴルフ場造成が計画された。この丘陵の有馬川側の北区道場町塩田・平田においては、古墳時代後期の古墳群や中世墓群が存在することから、他にも埋蔵文化財の存在する可能性が高いため分布調査を行った。その結果、埋蔵文化財の存在する可能性のある地点が数ヶ所確認され、そのうち今年度は道場町生野字ショブ谷・同町平田字木戸口の2地区内の4ヶ所の地点において埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施した。

2. 調査の概要

調査は各地点において幅1.2mのトレンチを数本設定して実施した。

ショブ谷遺跡

武庫川と船坂川の合流点付近にある生野の集落の裏山中腹に立地する。生野から塩田へ向ける旧街道の脇付近にあり、いくつかの平坦地と古墳状隆起が存在するため7本のトレンチを設定した。



fig. 310
調査地位置図
1 : 5000

古墳時代

1号墳

西方にのびる主幹尾根が、北西方向と南西方向へと尾根が2つに分岐する標高186mの最高所に位置する平坦面-1で検出された。1トレンチA区、2トレンチA区、4トレンチにおいて幅1.2m、深さ20cmの断面U字状の周溝が検出された。周溝は全周せず、3トレンチでは検出されなかつた。墳丘は確認された周溝の距離から径12.5mの円墳であることが明らかとなつた。墳丘盛土は中世山城の施設によって削平を受けている。

また、北東方向にのびる尾根上の2トレンチA区からは、須恵器片が5点出土している。いずれも細片で、詳細な時期は不明である。おそらく中世山城の施設である平坦面-1の形成時に削平され、周溝のみが残されたものと思われる。北西斜面に散乱する須恵器はこの古墳のものと思われる。

2号墳

南西方にのびる尾根上で中世山城の施設と思われる平坦面-2と平坦面-3との間の斜面に位置する。調査前の現状では、わずかな高まりを確認することができた。南北に設定した7トレンチで幅1.8mの溝を確認することができた。東西方向にトレンチを設定していないが、検出された溝内埋土や周辺から須恵器片が出土していることなどから、径11mの円墳が存在していたと考えられる。中央には埋葬主体と思われる土坑状の落ち込みが存在する。1号墳と同様、中世時に削平を受けたものと思われ、1トレンチD・E区に須恵器・土師器片が出土しており、その中には6世紀中頃の須恵器壊蓋が含まれている。



fig. 311 1号墳
(東から)

奈良時代

1トレンチE区の流土中から奈良時代の須恵器壊身片が出土した。それに伴う遺構は見つからなかったが、山の中腹からの出土であるため集落とは考えにくく、付近に蔵骨器等の墓址の存在する可能性がある。

中世

2トレンチB区の平坦面-4において2基の落ち込みが確認された。埋土中から12~13世紀前半の須恵器壊片が数点出土している。同時期の須恵器は1トレンチD区の流土中でも出土している。

集石 1 東南方に伸びる尾根上の平坦面 2 の東端で検出された。調査前の状況では拳大の礫が腐植土より露出しているのが確認され、須恵器片が散布していた。6 トレンチによって確認した集石の範囲は南北 8 m、東西 7 m で平面形は梢円形で、全面に礫が存在する。中央部がわずかに高く、周辺にいくにしたがって低くなっている。西隅は平坦面 - 2 の築成時に削平されたため平坦となっている。

石材は角礫で、大小のものが存在しており、外縁および中央部にやや大きめの石が存在している。また、礫は中央部で 10 cm 以上の堆積があり、上層ではやや大きい礫を、下層には小さい礫が存在したが、未完掘で規則性があるかは速断できない。出土した須恵器から 6 世紀中頃のものと思われるが、平坦面 - 2 が中世のものとすれば、この集石も削平されているものと思われる。この礫群が原位置を保っているか、あるいは、平坦面 - 2 築成時にこの位置に寄せられたものかは不明である。



fig. 312
6 トレンチ
古墳時代の集石
(東から)

古墳状隆起 この他平坦面 1 の北側と平坦面 - 5 において古墳状の隆起が存在するが、今回の調査では古墳と確定できる資料は得られなかった。前者の隆起は、中世山城に、後者の隆起は中世山城または中世墳墓に伴うものかもしれない。

墳墓群 2トレンチD区の平坦面-5においては拳大～人頭大の石の集石が存在した。これらの集石は直径1m前後でいくつかのまとまりがある。また、その中には人頭大の石を中心にしてまとまっているものもある。これらの形状から、中世の集石墓群と考えられる。またこの集石から約3m尾根の先に寄った地点では、幅50cm、長さ80～160cmの土坑状の遺構もあり、これも中世墓と考えられる。以上のように平坦面5付近は集石墓・土壙墓からなる中世墳墓群と考えられるが、調査は遺構のプラン検出にとどめ遺構内を掘っていないため、出土遺物は流土から出土した土師器片のみで、時期は明らかでない。



fig. 313
2トレンチD区
中世集石墓群

山城 1号墳のある平坦面-1を中心にいくつかの平坦地と堀・土塁・犬走り等が現状地形から確認できる。これらの状況から当地区は中世の山城と考えられる。

堀と土塁は平坦面-1・4の北側に東西方向に築かれ、北側の防御施設と思われる。堀-1は幅10m、長さ30m、深さ3.5mでカギ形に曲がっている。堀-2は、幅5m、長さ11m、深さ1.8mで土塁の東端の内側に掘られている。土塁は上部幅1.8m、基底部幅10m、外側からの高さ1.2～1.8m、内側からの高さ1.0～1.3mで、長さ48mにわたって堀-1の外側に築かれている。堀-1と土塁の間には、幅10mの平坦面がある。土塁と堀-2の延長線上の2トレンチB区においてピットが2基検出され、土塁と堀-2に続く柵列の可能性がある。

平坦面1の西側は尾根を切斷し旧街道との間に堀切を施している。南西から南斜面・東斜面には幅7~10mのいくつかの平坦面を築き、それぞれの平坦面は幅約2.0mの走りで連結されている。

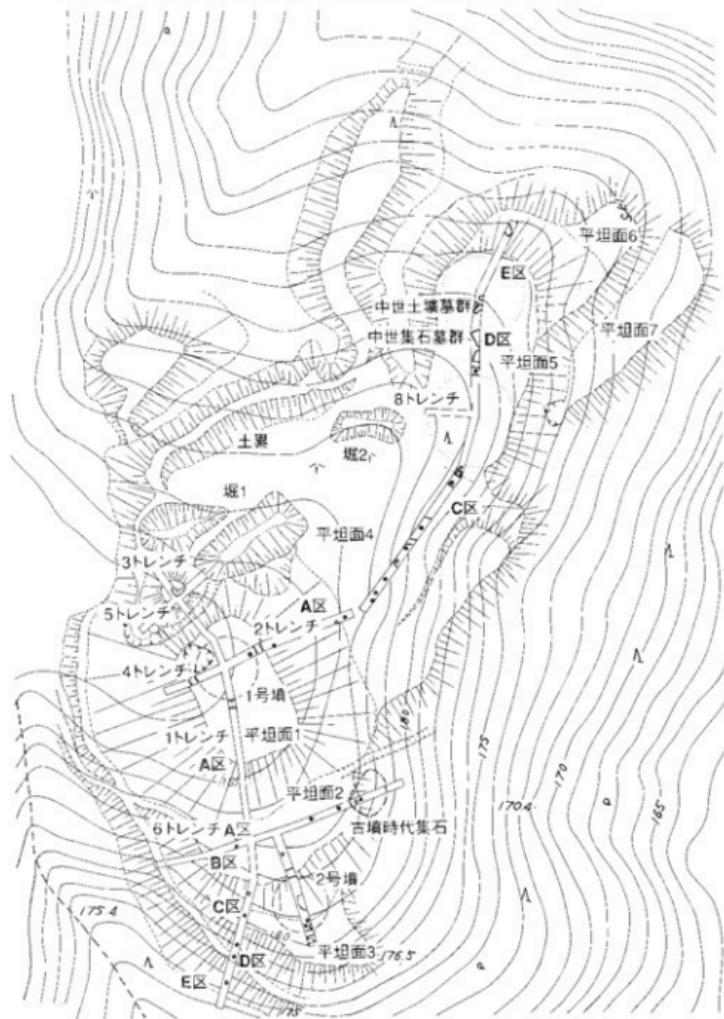


fig. 314 遺構測量図 1 : 2000

稻荷神社

裏山遺跡

第1地点

稻荷神社裏山1号墳（以下1号墳と称す）が存在する尾根の北側に対面する尾根上、標高207m付近に小さな平坦面が存在する。調査はこの平坦面と西側の斜面について実施した。斜面に設定した東西トレンチにおいては流出土が30～40cm堆積し、これを除去すると黄褐色土の地山を検出したが、遺構・遺物共に検出されなかった。

平坦面の中央に設定した南北トレンチにおいても、厚さ20cm程度の黄灰色土下に地山を確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。この平坦面の東端に設定した南北トレンチでは、表土下に厚さ5～15cmの黒灰色土層があり、奈良時代の須恵器坏身片1点が出士している。周辺に当時期の遺構が存在する可能性がある。また、黄灰褐色土の地山面をベースとして小穴1基が存在したが、時期は不明である。



fig. 315 調査位置図 1:2000

第2地点 稲荷神社裏山4号墳 1号墳が存在する尾根の北側の斜面の中程で、谷を堰き止めた溜め池の西南岸に位置する。調査前の状況では斜面を人為的にカットした跡と、その中央にわずかながら古墳状の隆起が認められたため調査を実施した。カット面は東西11m、南北7m（深さは南端で1.7m）にわたる。中央の隆起の周間に幅1.2m、深さ25cmの断面U字状の溝が巡るのを確認した。このことから周溝の距離で径10mの円墳であることが明らかとなった。墳丘の高さは東側の周溝底より1.2mで、北側はかなり流出している。

また、中央には埋葬施設と思われる幅1.5m、長さ約2.3mの隅円方形の土壙状の造構が存在している。この付近で古墳時代の須恵器壺片が2片出土しているが、詳細な時期を決定するには至らない。これらの状況から、木棺を埋葬施設とする円墳と思われるが、詳細は今後の調査で明らかにして行きたい。

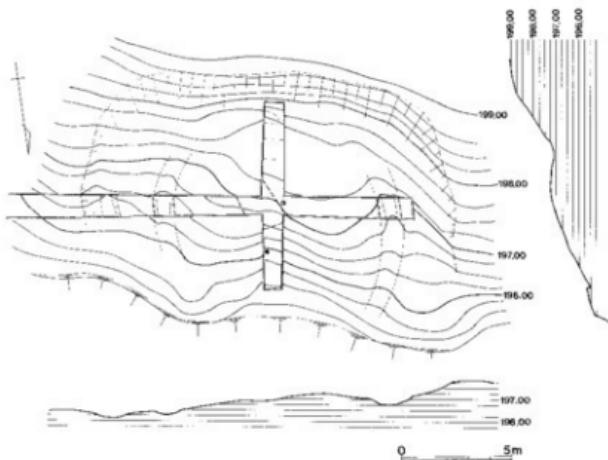


fig. 316 第2地点測量図

第3地点 1号墳と2号墳が存在する尾根の間に、南北17m、東西40mの比較的広い平坦面が存在する尾根がある。現状では古墳状の隆起は認められなかつたが、以前には古墳が存在していた可能性も考えられる。また他の造構の存在も予測されたため確認調査を実施した。

調査は尾根に並行な東西トレントレンチ1本と、平坦面中央と平坦面西端に2本の南北トレントレンチを設定した。いずれのトレントレンチからも造構・遺物は検出されなかった。各トレントの状況から、この平坦面は開墾によって形成されたものと思われる。

3.まとめ

ショブ谷遺跡では、古墳時代の遺構として古墳2基・集石遺構1基が確認された。これらの遺構は、出土遺物から6世紀前半から中頃につくられたものと考えられる。武庫川を挟んで対面する箭射山西麓には横穴式石室を埋葬施設とする6世紀中頃～後半の中野古墳群が存在する。また、今回の調査地の丘陵北端には、石槽のある横穴式石室を埋葬施設とする古墳を含む尼崎学園内古墳群がある。同じ丘陵の西側斜面においても南所・平田・稻荷神社裏山といった古墳時代後期の古墳群が存在する。これらに対し、同丘陵東斜面においては、これまで古墳の存在が知られていなかったが、今回の調査で新たに「生野古墳群」と呼べる古墳時代後期の古墳群の存在が確認できた。

また、中世墳墓群は丘陵の西側斜面の塩田でも見つかっており、この地域の中世における埋葬方法を知る手掛かりとなる。

さらに、堀・土塁・平坦地・犬走り等の施設が、良好な状態で残存する中世山城が確認された。しかし、この城跡に確実に伴うと考えられる遺物は出土せず、それぞれの平坦地の面積もさほど広くないことから、非常時にのみ使われた城と考えられる。この山城は武庫川沿いの街道から有馬川沿いの街道に抜ける鉢をおさえる役目も果たしていたと考えられる。同丘陵上の南西に少しぬなれた所に「ロクゴ」という小字が残っていることから、この城は戦国期に六郷治右衛門が城主となったと伝える「六郷城」の跡かもしれない。

稻荷神社裏山遺跡では、尾根の平坦地上から奈良時代の須恵器壊身が出土している。のことから、付近に奈良時代の蔵骨器を埋納した墓址の存在する可能性がある。

また、第2地点で見つかった古墳は、稻荷神社裏山古墳群に属するので、「稻荷神社裏山4号墳」と名付ける。この古墳群中の1～3号墳は横穴式石室を埋葬施設とするのに対し、この4号墳は木棺を直葬する埋葬施設と考えられることから、同一古墳群中における墓制の変化を見ることができるもの。

えいばら 26. 宅原遺跡

1. はじめに

昭和 58 年より北区長尾町において、県営圃場整備が開始され、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査を同年より開始した。今年度は、調査地点が 17ヶ所に分かれており、調査面積は計 3,040 m²である。遺跡名は、岡工区は宅原遺跡宮ノ元地区、豊浦工区は宅原遺跡豊浦地区及び西豊浦地区、下上津工区は下上津遺跡大江ノ前地区である。調査は、水田造成、排水路掘削、パイプライン・上水道埋設、道路設営等によって遺物包含層及び構面の削られる部分について行った。

宅原遺跡〔宮ノ元地区〕

2. 調査の概要

宅原遺跡の今年度の調査地は、長尾川右岸の丘陵から延びた低位段丘上に位置する。この低位段丘は小さな谷によっていくつかに分断されており、宮ノ元地区はその一つに立地する。

宮ノ元地区ではこれまでの調査で、木彫面などの律令祭祀的な遺物の出土した 7 世紀代の溝や、同時期の竪穴住居・掘立柱建物、8 世紀代の掘立柱建物、12 世紀の掘立柱建物などが見つかっている。

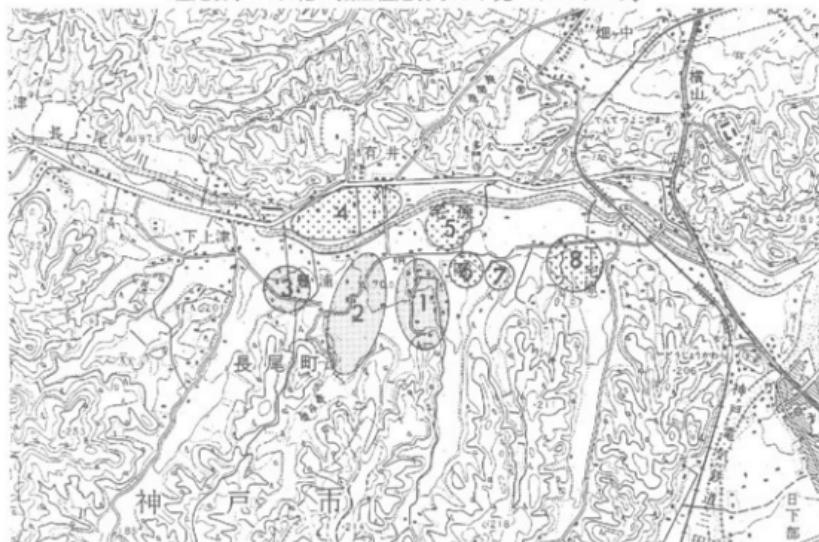


fig. 317 宅原遺跡群位置図 1 : 25000

- | | | | |
|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1 : 宮ノ元地区 | 2 : 豊浦地区 | 3 : 西豊浦地区 | 4 : 有井地区 |
| 5 : 内堀地区 | 6 : 岡下地区 | 7 : 蓮花寺地区 | 8 : 辻堀内地区 |

1 トレンチ このトレンチでは、飛鳥時代～平安時代初期・平安時代末期の遺構が
飛鳥時代～平安時代 検出された。

SX 05 調査区北西隅で検出された不定形の落ち込みで、規模は調査区外に広がる
ため不明である。深さは約1mあり、底には溝と畦畔状の高まりがある。
埋土は上層と下層に分けられ、下層からは7世紀前半の遺物だけが出土し、
上層からは7世紀初頭～8世紀前半の遺物が混在して出土している。

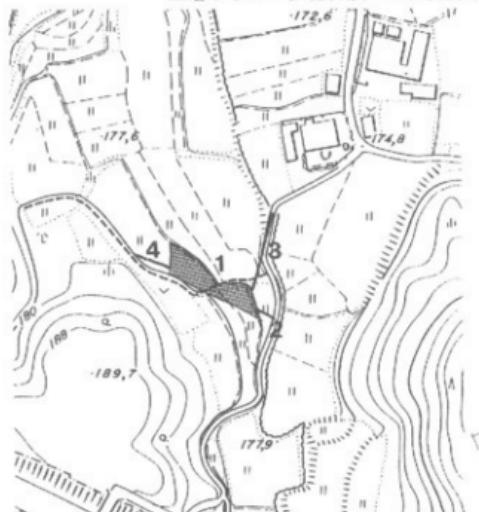


fig. 318 宮ノ元地区トレンチ配置図 1 : 2500

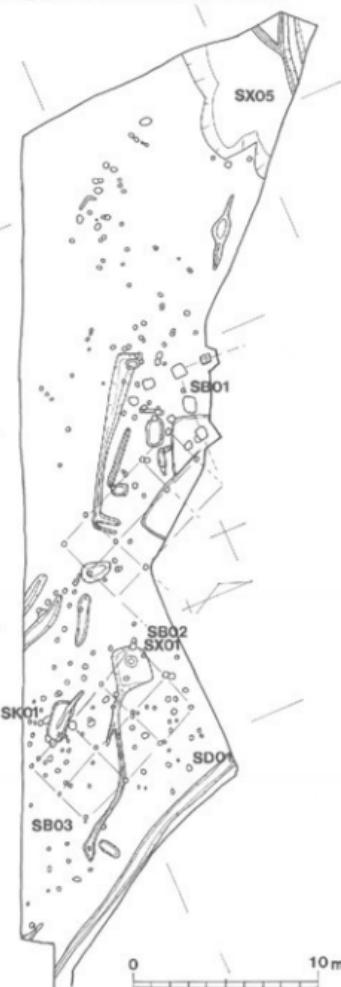
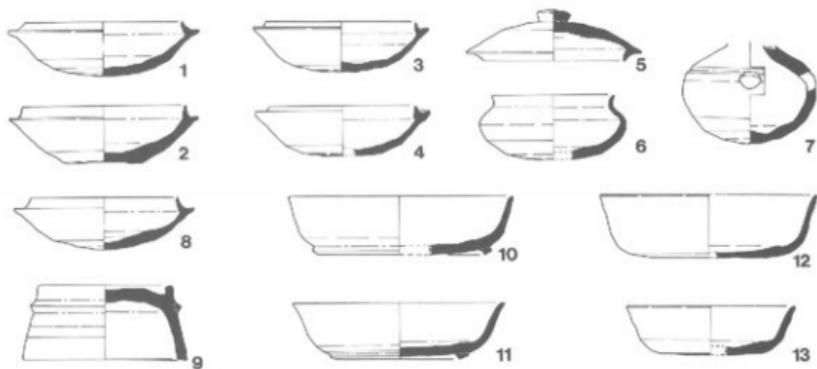


fig. 319 1 トレンチ SX 05
出土遺物実測図 (S=1/6)

fig. 320 1 トレンチ遺構配置図

fig. 321 1 トレンチ SX 05 出土遺物実測図 ($S=1/4$) 1～7 下層 8～13 上層

SK 15 1.3 × 1.0 m、深さ 25 cmの楕円形の土坑で SD 07 と SD 08 が取りつく。

SK 15 からは、7世紀初頭の須恵器の坏身、蓋が出土している。

SX 01 1辺 2.1 mの隅円方形の土坑で中央部に直径 70 cm、深さ 20 cmの凹みがあり、南東隅では SD 02 が取りつく。中からは7世紀代と8世紀中頃の遺物が出土している。

SB 01 2間以上×1間以上 (4.3 以上 × 2.3 m 以上) の建物である。柱穴掘形が方形の掘立柱建物であるが、梁行・桁行共に調査区外に延びるため、

fig. 322 1 トレンチ
全景 (東から)

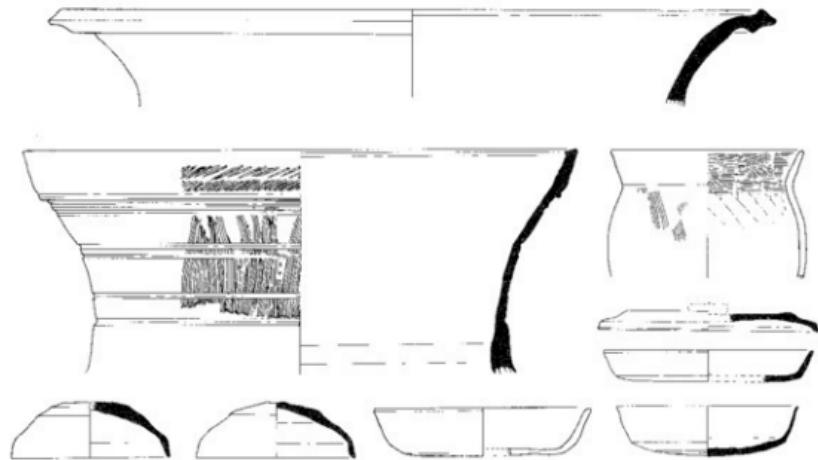


fig. 323 1トレンチ SX 01 出土遺物実測図 ($S=1/4$)

全体の規模はわからない。主軸はほぼ真北に向ける。柱掘形の大きさは1辺60～70cm、深さ50cmである。掘形内から7世紀初頭の須恵器片が出土している。

SK 04 1.0×1.7mの精円形の土坑で、深さは25cmである。土坑の底から8世紀中頃の土師器壊が出土している。

SK 01 2.1×1.1mの長方形の土坑である。ほとんど削平を受け、深さ9cmと浅い。SD 03 が SK 01 内から外に流れ出ている。8世紀末～9世紀初頭の須恵器の壊身・蓋・土師器が出土している。

平安時代後期 4間×2間以上 (8.7×4.5m以上)

SB 02 の掘立柱建物である。調査区外に延びるため全体の規模はわからない。主軸は北からやや西に振っている。柱穴内から12世紀中頃の須恵器壊が出土している。

SB 03 2間×3間 (4.8×3.9m) の掘立柱建物である。遺物は柱穴から中世の須恵器の小片しか出土していないため正確な時期は明らかでないが、SB 02、SD 01 と同じ主軸方向であることから12世紀中頃と思われる。

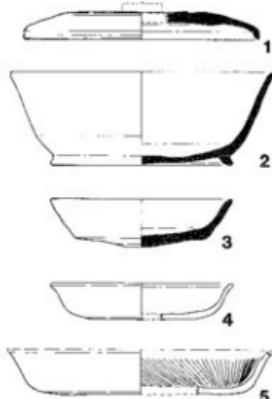


fig. 324 1トレンチ SK 01・01
出土遺物実測図 ($S=1/4$)
1～3・5 : SK 01 4 : SK 04

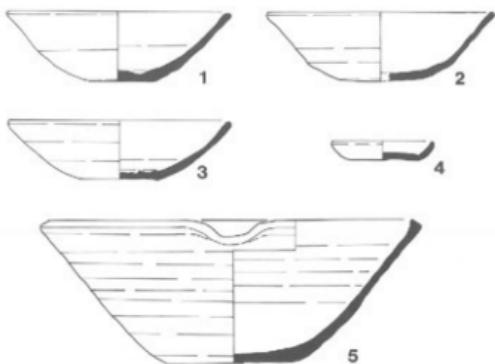


fig. 325 1トレンチ中世遺構出土遺物
実測図 ($S=1/4$)
1~3: ピット群 4・5: SD 01

SD 01 幅50~80cm、深さ15~20cmの溝で、南から北に向かって流れていたと考えられる。埋土内より12世紀中頃の須恵器・土師器が出土している。またSB 02・03と方向を同じくするので、これらの建物に関連する溝と考えられる。

遺物包含層 遺物包含層からも遺構と同時期の7世紀初め~8世紀終わりのものと、12世紀の遺物が出土している。その中に円面鏡の破片が1点ある。

2~4トレンチ 2トレンチでは1トレンチSD 01の続きとピット2基が、3トレンチではピット3基が検出されている。4トレンチでは遺構は存在しなかった。

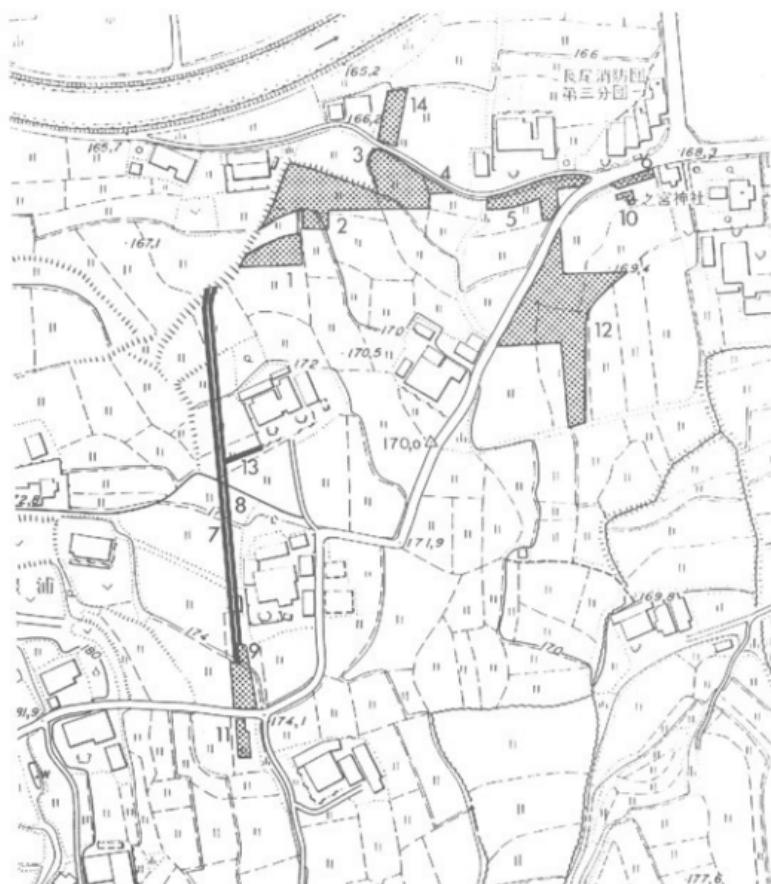


fig. 326 1トレンチ
西半遺構群（東から）

とようら
〔豊浦地区〕

豊浦地区は宮ノ元地区と同様に低位段丘上に立地し、小さな谷を隔てて宮ノ元地区の西側に位置する。

豊浦地区のこれまでの調査では、8世紀代の掘立柱建物が検出されており、同時代の遺構から「五十戸口」・「郷長」と書かれた墨書き土器が出土している。また、9世紀の掘立柱建物や12世紀から13世紀にかけての掘立柱建物・井戸・木棺墓などが見つかっている。



1 トレンチ このトレンチでは、6世紀後半の古墳時代後期と12～13世紀の中世前半期の遺構が検出された。

fig. 328
1 トレンチ
遺構配置図
(S=1/250)

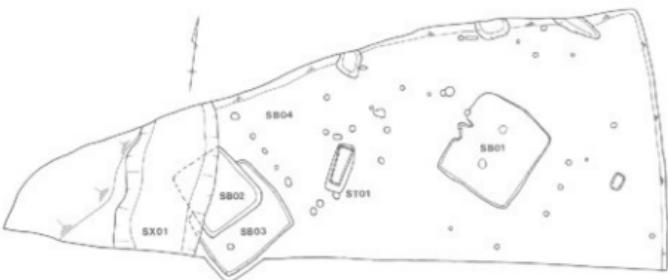


fig. 329
1 トレンチ
全景（東から）



古墳時代後期 4.2×3.8m の方形の竪穴住居である。深さは南西辺で 20cm、北東辺で 5cm を残すのみで、かなり削平をうけている。主柱は 2 本で、北西辺の中央に地山を削り出したカマドを設けている。火災に遇っており、炭化材・炭・灰・焼土が住居内に堆積している。遺物の量は少なく、須恵器坏身・蓋の破片と土師器片が出土している。

SB 02 SB 02 は 3.9×3.8m の方形の竪穴住居で、北西辺を SB 03 と SX 01 に切られている。壁高は 10cm で、主柱は南西隅の 1 本のみが検出された。埋土中から須恵器・土師器片が出土した。

SB 03 3.5×3.3m の方形の竪穴住居である。残存する深さは 25cm で、SX 01 に切られ、SB 02 を切っている。柱穴は検出されず、主柱の本数は不明である。住居内からは須恵器の坏身・蓋、土師器の壺の破片が出土している。

SX 01 幅約 4m、深さ 20cm の広く浅い溝状の遺構で、SB 02・03 を切っている。埋土の上層から須恵器坏身が出土している。以上、4つの遺構は出土遺物からすべて 6世紀後半の遺構である。しかし、その切り合い関係から



fig. 330 1 トレンチ SB 01 焼失状況図



fig. 331 1 トレンチ SB 01 焼失状況
(南東から)

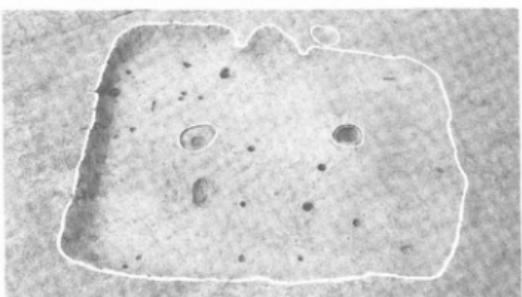


fig. 332 1 トレンチ SB 01 完掘状況
(南東から)

SB 02 → SB 03 → SX 01 の順に造られたものである。

SB 04 3間×3間以上(4×5.8m以上)の掘立柱建物である。ただし、南西辺では半間の距離で柱が存在する所があり、南東辺では1間分柱穴が検出されなかつた。柱穴の直径は約25~40cm、深さは25~35cmで、柱穴から遺物は出土していない。ST 01に切られており、SB 02・03と棟方向を同じにするため古墳時代後期の建物と考えられる。

平安時代後期 4.2×0.8mの長方形の掘形に1.8×5.5mの木棺の痕跡を残す木棺
ST 01 墓である。深さは22cm残存する。主軸は北から少し東に振る。棺内の北

169.500m

辺付近から白磁碗1個・土師器小皿5枚・刀子1本が出土している。出土状態から棺上に置かれたものと、棺内に納められていたものがあると考えられる。

169.500m

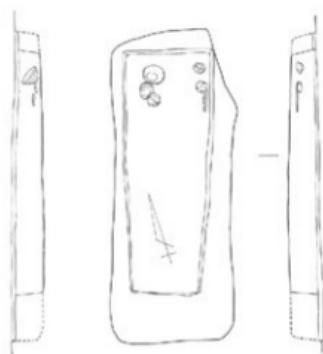


fig. 334 1トレンチ ST 01
平面・立面図

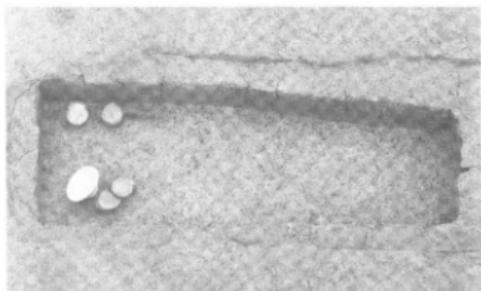


fig. 335 ST 01 近景(西から)

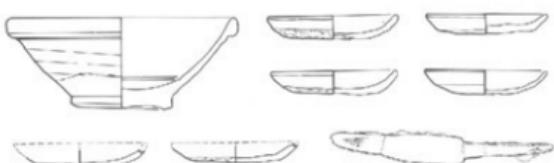


fig. 336 ST 01 出土遺物実測図 (S=1/4)

2 トレンチ このトレンチでは、耕土・床土直下の淡茶灰色粘質土をベースとする中世末の遺構面と明黄褐色粘土の地山をベースとする古墳時代後期・平安時代後期の2面の遺構面が確認された。この2面の遺構面に3時期の遺構が存在する。

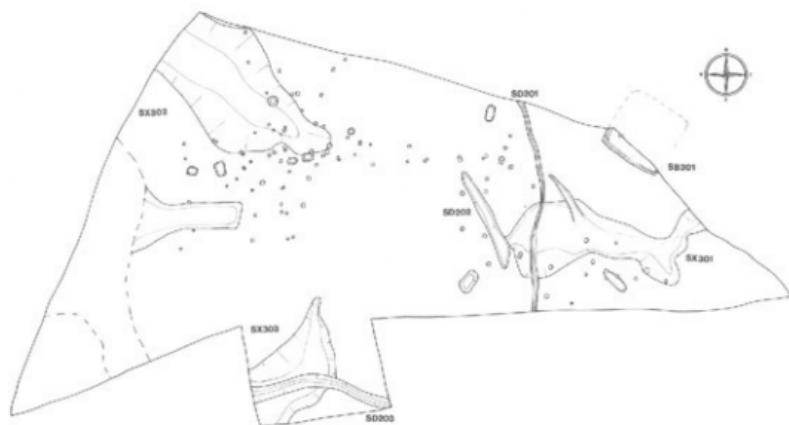


fig. 337 2 トレンチ古墳時代・中世前半期遺構配置図 (S=1/400)



fig. 338 1・2 トレンチ全景（南西から）

SB 301 一辺 4.5 m の方形の竪穴住居と考えられるが、南西の 1 辺が残存し、他の 3 辺は削平されている。西隅の柱穴 1ヶ所が検出されているので 4 本柱と考えられる。残っている範囲内には周壁溝が確認された。

遺物は住居内の西隅付近から完形品の須恵器壺蓋 2 個体が出土し、南西辺の床面から鉄鎌が 2 本出土している。

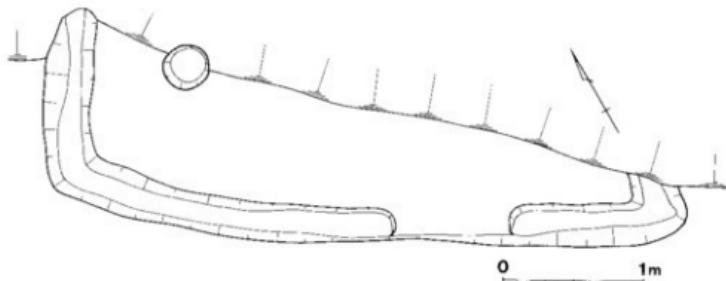


fig. 339 2 トレンチ SB 301 平面図

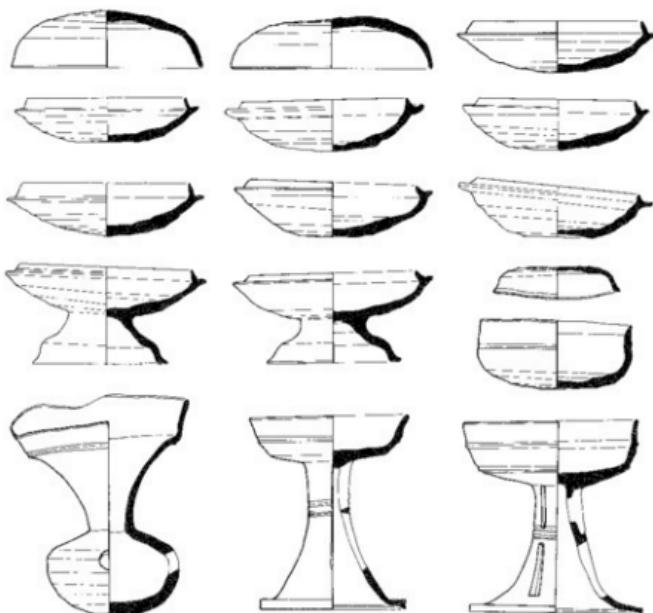


fig. 340 2 トレンチ SB 301 出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{4}$)



fig. 341
2 トレンチ SB 301
遺物出土状況
(北から)

SX 301 ~ 303 SX 301 ~ 303 は何れも不整形の落ち込みで、段丘の端へと続いている。埋土の上層は中世の遺物包含層と同一の層であるが、下層は古墳時代の遺物のみを含んでいる。遺構の年代は出土遺物から SB 301、SX 301・302 が6世紀末、SB 303 が7世紀前半と考えられる。

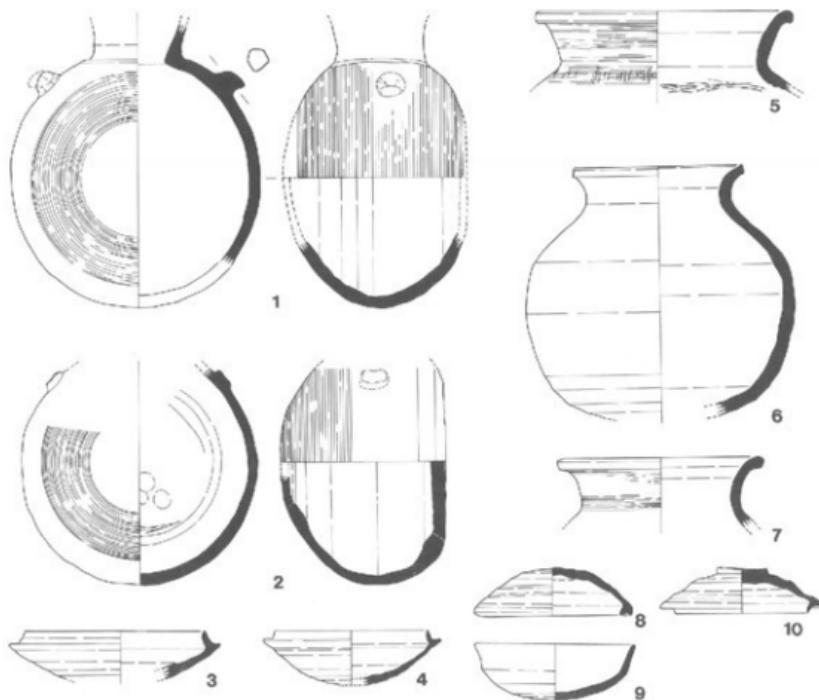


fig. 342 2 トレンチ SX 301 ~ 303 出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{4}$)
1・4 : SX 301 2・3 : SX 302 5~9 : SX 303

SD 201～203 SD 201は、幅30cm、深さ15cmの溝で南から北に傾斜している。溝内から須恵器塊・鉢が出土している。SD 202は、幅70cm、深さ10cmの浅い溝で、かなり削平されていると考えられ、調査区内でとぎれている。溝内から須恵器の小皿と土師器の皿が出土している。SD 203は幅90cm、深さ35cmで、断面V字形の溝である。南東から北西に向かって傾斜しており、段丘端に続いている。遺物は須恵器の塊・小皿・土師器の小片が出土している。

ピット 第2構造面では多数のピットが検出されたが、ほとんどが中世前半期のピットである。SP 82からは「熙寧元宝」1枚、「○○元○」1枚と銭種不明1枚の計3枚の銭貨が出土し、SP 402からは土師器の小皿が2枚出土している。これらは地鎮に関するものと考えられるが、建物としてまとまるものはない。



fig. 343 2トレンチ中世末期遺構配置図 (S=1/400)

中世末期 妻入の掘立柱建物と考えられ、西半部に3部屋の床間、東半部が土間で

SB 101 あると思われる。建物の規模は 6.9×10.5 mである。この建物は近世以降に多く見られる農村民家の初現形態であると考えられ、床間は3部屋を1列に配置する。SK 104はこの建物に付属する土坑で、直径65cm、深さ65cmで、ほぼ円筒形をしている。現存する民家の例から、この位置には馬屋があったと考えられ、それに関係する施設と考えられる。

SB 102 棟方向がほぼ真北で、2間×4間の東西両側に1間分の下屋を持つ掘立柱建物である。規模は 6.9×8.2 mで、SB 101とほぼ同じであるが、建物の構造は大きく違い、棟持柱を使った簡素なつくりである。南東隅と北西隅には突き出た部分がある。数部屋に分かれていたかどうかは明らかで

ないが、床はなく、土間とご座敷程度であったと考えられる。

SB 103 SB 102 とほぼ同規模の 7.2×7.1 m で 2 間 \times 4 間の東西両側に下屋を持つ掘立柱建物である。棟方向は北から少し東に振っている。北東隅の柱穴が SD 103 に切られている。この SD 103 は SB 102 に付随する溝で、SB 102 と SB 103 は同規模で同じ構造の建物であるところから、SB 102 は SB 103 を建て替えたものと考えられる。

SB 104 SB 104 は建物と建物の間にある 1 間 \times 2 間で、 1.8×2.8 m の小さな掘立柱建物である。ほぼ真北に棟方向をとることから SB 101・102 と同時期の建物であると考えられる。

柵列 SA 101～104 は SB 101 と SB 102～104 を区切る柵列である。柵列の方向から SA 102 と SA 103 が対応し、SA 101 と SA 104 が対応する。中央部は柵がとぎれており、ここが通路と考えられる。SA 101・104 が SB 103 と同時期で、SA 102・103 を SB 102 の建て替えに伴って作り直したものと考えられる。

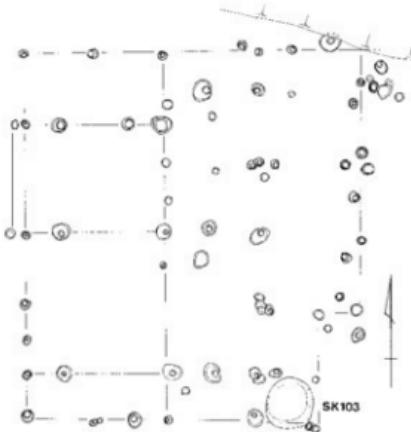


fig. 344 2 トレンチ SB 101 平面図

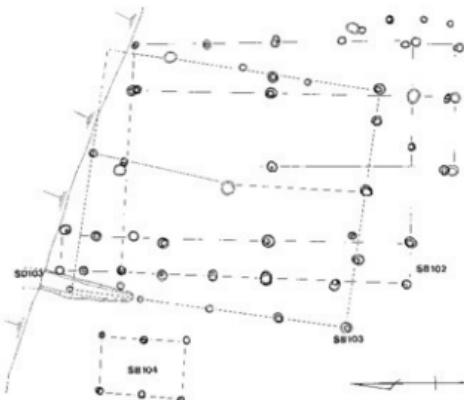


fig. 345 2 トレンチ SB 102～104 平面図

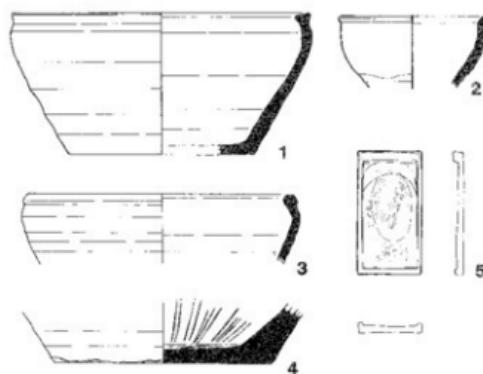


fig. 346 2トレンチ中世末期造構内出土遺物実測図 ($S = 1/4$)
1・4・5 : SK 104 2・3 : SK 101

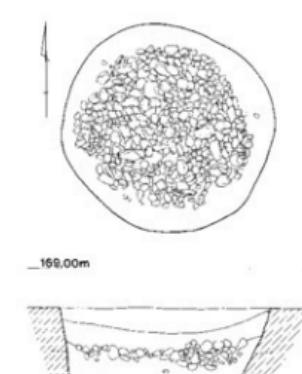


fig. 347 2トレンチ SK 101 確出土状況
($S = 1/40$)

SK 101 SB 102 の東側にあり、直径 1.5 m、深さ 50 cm ではほぼ円筒形をした上坑である。その埋土の中層では拳大の礫がつまっており、その間から下駄、丹波焼の鉢、瀬戸・美濃焼の天日茶碗が出土している。

SK 104 SB 101 の南側にあり、埋土の状態からかつては灌水していたようである。SK 104 は 2×3 m、深さ 20 cm の隅円長方形の形状をする。

SX 102 SX 102 は 3.5×3.8 m、深さ 15 cm の隅円長方形の形状をしている。SK 104 は SX 102 が埋まっているから掘り直されたものと考えられる。SK 104 の底から丹波焼のすり鉢・鉢、石硯が出土している。

3・4トレンチ 3・4トレンチは、水田、道路、排水路によって削平される部分の調査区である。遺構は3トレンチで溝4条、土坑4基、ピット7基、4トレンチで埋没谷地形を検出した。但し、埋没谷地形は工事影響レベルまでの調査しか行っていない。遺物は溝内から 12世紀後半～13世紀の須恵器塊、青磁碗、瓦器塊の小片が出土している。遺物包含層からは、6世紀後半の須恵器塊、10世紀後半～13世紀初めの須恵器塊・鉢や外面に二つ巴文の叩きを施した壺の破片、土師器片が出土している。

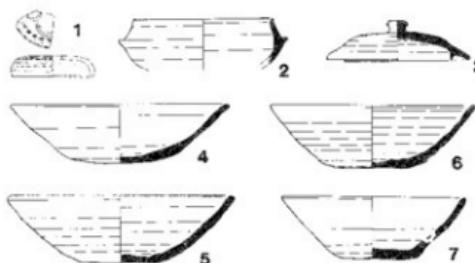


fig. 348 2～4トレンチ遺物包含層出土遺物実測図

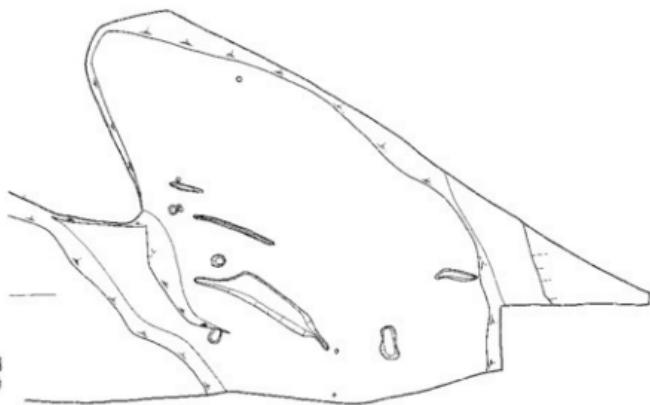


fig. 349
3・4 トレンチ遺構
配置図 (S=1/400)



fig. 350 3・4 トレンチ遺物包含
層出土遺物拓影 (S=1/6)

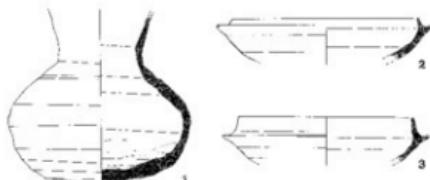
5 トレンチ 5 トレンチは4 トレンチの東側に位置する切り土部分についての調査区である。基本層序は、耕土・床土・淡灰色粘質土・黄灰色粘質土・褐色粘質土・地山となっており、地山面が遺構検出面である。遺構は、西端の溝のみである。

SD 01 調査区西端に位置する幅約 30 cm、深さ約 10 cm の浅い溝である。出土遺物がないため、時期は不明確である。遺物包含層（旧耕土を含む）からは、12世紀後半～13世紀を中心とする時期の須恵器・土師器等が出土している。また、地山面直上からは、縄文時代のサヌカイト製の石器や尖頭器が出土しており、近くに縄文時代の遺跡の存在が想定される。

6・10 トレンチ 6 トレンチは道路拡幅に伴う切り土部分で、溝 2 条を検出した。10 トレンチは、6 トレンチで検出された SD 02 の方向を確認するために設定したトレンチである。検出遺構として、溝・ピット及び土壙墓がある。

SD 01 調査区中央部で検出された幅約 40 cm、深さ約 15 cm の南北方向の溝である。12世紀中頃の須恵器片・土師器片が出土している。

SD 02 調査区西半で検出された溝で、南西から弧状を描きつつ北東方向へ、調

fig. 351 6トレンチ SD 02出土遺物実測図 ($S=1/4$)

査区中央で浅い溝が合流するような形のものである。遺物としては、溝底より須恵器の直口壺や、埋土中より須恵器坏身が出土している。また、上層からは、皮袋形提瓶の破片が出土している。古墳時代後期後半の溝と考えられる。

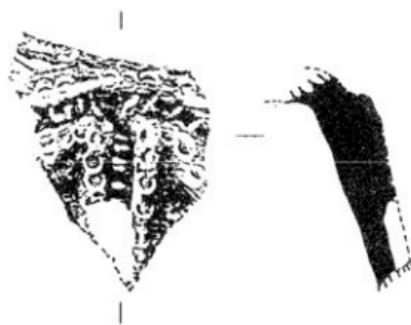
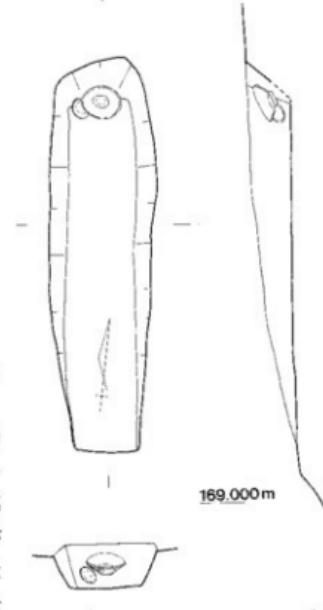
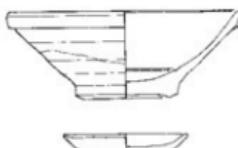
fig. 352 6トレンチ SD 02出土皮袋形提瓶 ($S=1/4$)

fig. 353 10トレンチ ST 01平面・立面図

ST 01 0.48 × 1.75 m以上の長方形で主軸をほぼ北に向けた土壙墓である。時期は12世紀代と考えられる。南端は削平を受け、長さは明らかでないが、1.8m前後と思われる。土壙墓内の北端から白磁碗と土師器小皿が各1点出土している。木棺の痕跡は確認されなかったため、土壙墓と考えられ、遺物の出土状態から埋葬後、土壙の上に板等の蓋をして、その上に土器等を供えていた可能性がある。

遺物包含層からは、古墳時代後期の須恵器片をはじめ、10世紀～13世紀の須恵器・土師器片が出土している。また、サヌカイト片やチャーチ片も出土しており、5トレンチと同様に縄文時代の遺跡の存在が想定される。

fig. 354 ST 01出土遺物実測図 ($S=1/4$)

7・8トレンチ

7・8トレンチは、豊浦地区の今年度調査分の西端に位置する。幅1～1.5m、長さ約190mにわたって並行する2本のトレンチを設けた。現水田畦畔により北からA区～G区の7区に分けた。

A～D区は、耕土・床土下はすぐ地山となる。溝・ピット・土坑等を若干検出した。A区では8トレンチ側で、ピットを検出した。遺物は出土していない。8トレンチB区北端では中世末～近世前半の須恵器小皿を集積する土坑を検出した。C区では溝3条・土坑1基・ピット4基を検出、D区では幅60cm、深さ25cmの溝(SD01)とピットを検出した。SD01からは須恵器片・土師器片等が出土している。E区は埋没谷の中央部にあたり、工事影響レベルまでの掘削を行い、最深部の検出はできなかった。下層から奈良時代の須恵器壺が出土している。F・G区では、溝とピットの検出にとどまった。ピットも浅く、建物として並ぶものはなかった。

9トレンチ

9トレンチは、7・8トレンチの南側に位置し、水田、道路の切り土部分にあたる。北側の一段低い部分をA区、南半をB区とする。

A区

A区は水田開墾時に大きく削平されたため、耕土・床土下はすぐ地山となり、遺構の検出はなかった。

B区

B区でも遺物包含層が稀薄で、耕土・床土下で遺構面となるが、落ち込み、溝及びピット群を検出した。

SB01

SB01は北西・南東方向に並び、3間×6間以上の建物が考えられる。後述のSX02を切り込むピットを含むことと出土遺物より、13世紀以降の時期が考えられる。

SX02

B区南半で検出した浅く広い落ち込みで、西から東に緩く傾斜しつつ、東端で溝状になり、現在の水路により切断されている。灰茶色粘砂質土を埋土とする。

SX01

SX02の北端に位置する。2×2m、深さ10cmの不整形の落ち込みで、12世紀後半から13世紀を中心とする須恵器壺・小皿、土師器小皿、白磁碗等が多量に出土した。

fig. 355 9トレンチ遺構平面図

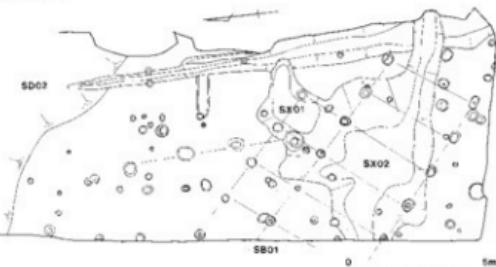


fig. 356 9トレンチ SX 01 遺物出土状況図
(S=1/40)

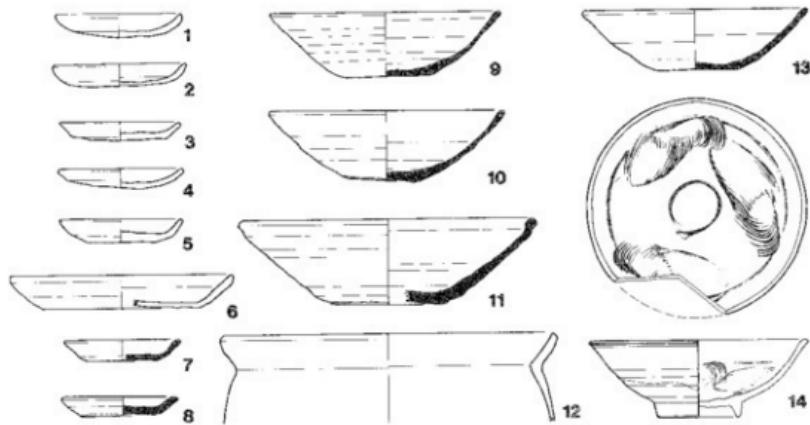


fig. 357 SX 01 出土遺物実測図 (S=1/4)

SD 02 B区東端を南北にはしる幅0.4~1m、深さ15cmの溝である。溝底レベルはわずかに北側が高い。先述のSX 02に切られている。北半から11世紀後半~12世紀前半の遺物が出土している。

ピット ピットの中では、埋土が灰色粘質土の一群がB区南半に集中する。30×40cmの隅円長方形の掘形のピットが主流であるが、ほとんどが深さ10~15cmである。SP 231は60×70cmの隅円方形の掘形で、径30cmの柱痕を検出した。深さは40cmである。掘形底から硯に転用された8世紀代の壺が出土した。この時代の建物の存在が考えられるが、対応する柱穴は、北へ3間分確認できたが、東西方向への柱穴は確認できなかった。

11トレンチ このトレンチは、18m×60cmである。北半部で土坑、南半部でピットと溝を検出した。また、昨年度の15トレンチのSD 18の北側の肩部と思われる落ちを検出したが、工事影響レベル下のため精査は行っていない。

SK 01・03からは、12世紀後半の須恵器小片が出土している。南端のSD 01は幅60cm、深さ25cmである。遺物は出土していない。

12トレンチ 12トレンチでは、古墳時代後期・飛鳥時代～奈良時代・中世前期・近世の遺構が検出されている。

古墳時代後期 幅0.7～1.3m、深さは最深部で15

SD 01 cmの溝である。北西から南東方向に弧を描いて流れているが、先端は削平され途切れている。埋土内から須恵器壺・提瓶・魁が出土している。6世紀前半と考えられる。



飛鳥時代～奈良時代 2間×3間(3.2×3.9m)の掘立柱

SB 05 建物と考えられるが、桁行の側柱は検出されなかった。これは柱穴が浅く、後世の削平を受けたためと考えられる。柱穴掘形の規模は1辺30～40cm、深さ10～50cmである。

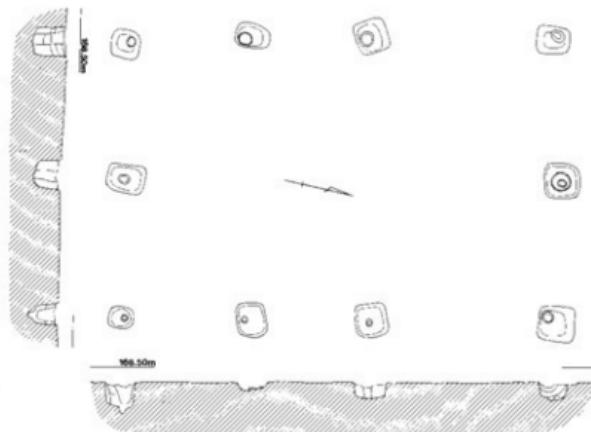


SB 06 2間×3間(3.9×5.7m)の掘立柱建物で、柱穴掘形の大きさは1辺30～45cm、深さ15～45cmである。遺物は柱穴から須恵器・土師器の小片が出土している。



fig. 358 SB 05 平面・断面図
(S=1/80)

fig. 359 SB 06
平面・断面図
(S=1/80)



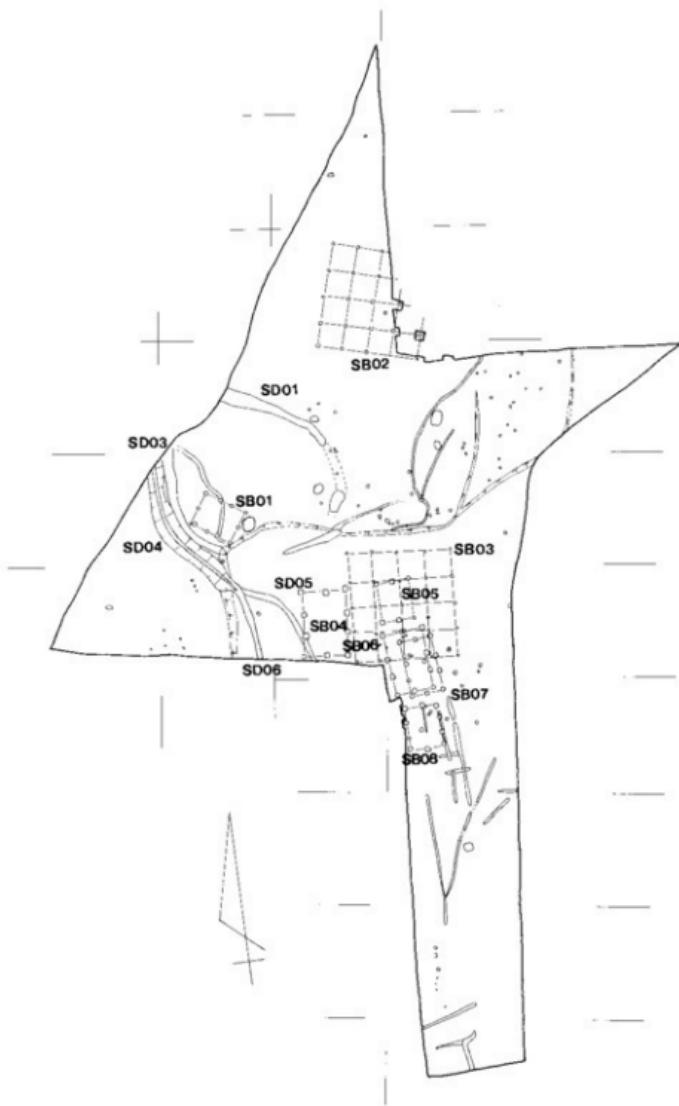


fig. 360 12 トレンチ造構配置図 (S=1/500)

SB 07 2間×3間(3.1×5.2m)の掘立柱建物である。掘形の規模は1辺25~40cm、深さ10~40cmである。SB 06とほぼ同位置に建ち、棟方向も同じであるため、どちらかの建物が建て替えられたと考えられるが、柱の切り合いがないため前後関係は不明である。

SB 08 2間×3間(3.2×4.4m)の掘立柱建物である。柱穴掘形の規模は1辺30~40cm、深さ10~50cmである。

SB 05~08の掘立柱建物群は、南北方向に一列に並び、真北から少し西に振った同一の主軸方向をとり、建物の形状をほぼ同じくするので、同時期の建物群と考えられる。時期はSB 05・06の柱穴内から出土した遺物から7世紀後半と考えられる。

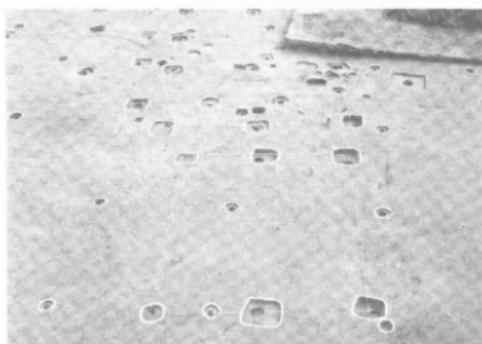


fig. 362 12トレンチSB 05・06・07(北から)



fig. 361 SB 07 平面・断面図(S=1/80)

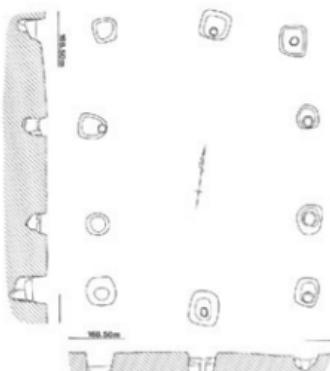
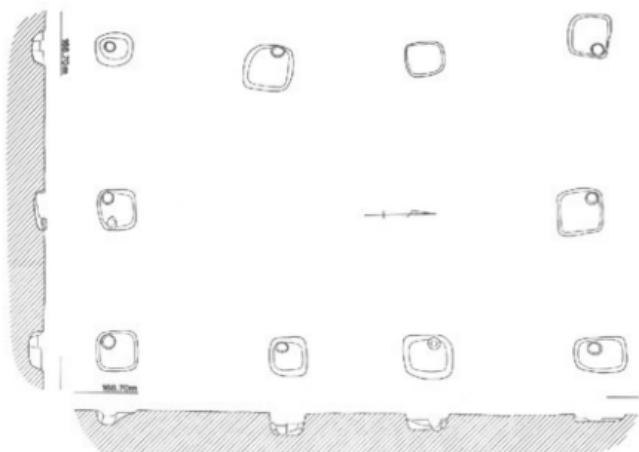


fig. 363 SB 08 平面・断面図(S=1/80)

SB 04 2間×3間(4.4×6.5m)の主軸をほぼ真北に向ける掘立柱建物である。柱穴掘形の規模は1辺40~60cm、深さ10~30cmである。遺物は細片しか出土していない。先述のSB 05~08とは柱穴掘形の大きさや主軸の方向が違い、また、SD 06(7世紀後半の溝)を切っているので、SD 04・05と同時期の奈良時代の建物と考えられる。

fig. 364 SB 04
平面・断面図

SD 04～06 SD 04は幅1.0m、深さ60cmの断面V字形の溝である。北西から南東に向かって弧を描いて流れていたと考えられる。最下層から7世紀後半～8世紀前半の遺物が出土した。埋没後もう一度掘り直され、幅70cm、深さ30cmの溝となる。

また、南東側ではSD 05・06と繋がっており、SD 05からSD 06に付け替えられていたようである。SD 06から7世紀後半の遺物が出土しているので、SD 04・06は7世紀後半につくられ、7世紀後半～8世紀前半までの間にSD 06からSD 05に付け替えられ、8世紀中頃には埋まっていたのち、8世紀後半にまた掘り直されたと考えられる。



fig. 365 12 トレンチ SD 03～06（西から）

- 平安時代後期 4間×4間（9.2×9.2m）の掘立柱建物である。北東側は調査区外に出るが、規模を確認するために調査区を一部拡張した。柱穴の掘形の大きさは直徑約30～40cm、深さは10～30cmと浅く、後世の削平を受けている。主軸は北から少し東に振っている。柱穴内からの出土遺物はないが、付近の遺物包含層出土の遺物や、すぐ北に10トレンチの土壙墓（ST 01）が存在することから12世紀代の建物と考えられる。
- SB 02 4間×4間（9.0×9.6m）の掘立柱建物である。主軸はほぼ北に向いている。柱穴の大きさは直徑20～30cm、深さ25～40cmである。柱穴内から須恵器・土師器の小片が出土している。
- SD 03 幅70cm、深さ40cmで、SD 04とはほぼ並行して北西から南東に向かって流れる溝である。埋土の中層から13世紀前半の土器が出土しており、その時期の溝と考えられる。

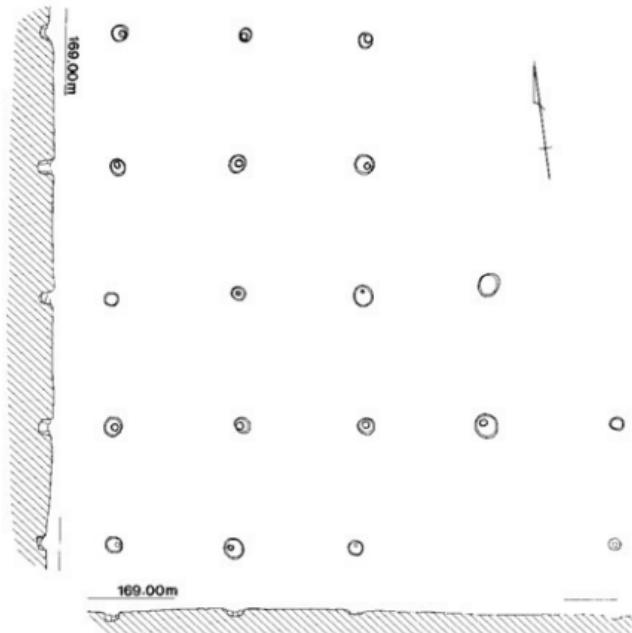


fig. 366 SB 02 平面・断面図 (S=1/80)

- 近世中期 2間×3間（3.4×4.3m）の掘立柱建物である。柱穴掘形の大きさはSB 01 直径35～40cm、深さ20～45cmで、柱材が残るものもあった。柱材は面取りをした角材である。後述のSK 01と同時期と考えられ、17世紀後半～18世紀前半の建物と思われる。
- SK 01 SB 01の東側に接して存在する、直径1.1m、深さ85cmの円筒形の土坑である。中に直径1.0mの桶を組み入れ、桶の下と周囲は粘土を詰めている。SB 01の東に接してつくられていることから、生活排水を溜めて汚水を浄化する「ハシリサキ」と考えられる。埋土内から染め付け碗片、陶器片が出土しており、17世紀後半～18世紀前半のものと考えられる。

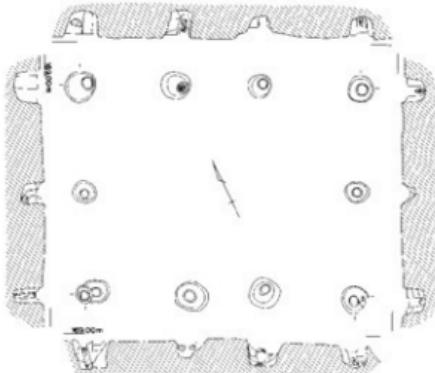


fig. 367 SB 01 平面・断面図 (S=1/80)

遺物包含層 旧耕土層・遺物包含層等から、縄文時代の石鏃7点・石匙1点・楔形石器1点・サヌカイト片・チャート片が出土している。北側の5・6トレンチからも有舌尖頭器や石鏃・尖頭器・楔形石器等が出土しており、付近に縄文時代の遺跡があり、洪積段丘の上に立地するため、ほとんど削平されているものと考えられる。土器は出土していない。

また、調査区北東半の遺物包含層から10世紀代の須恵器が多く出土し、それに混じって綠釉陶器・白磁碗片が出土している。

13トレンチ このトレンチは、第8トレンチD区に取りつく幅70cmのものである。耕土・床土下、すぐに地山となる。耕土より土器片が出土したが、遺構は検出されなかった。

14トレンチ このトレンチで発見された遺構は幅30cm、深さ10cmの溝1条とピット5基だけである。遺物は溝内から須恵器・土師器の小片が出土し、旧耕土層から外面に三つ巴のタタキがある甕の破片と、土師器の鍋片が出土している。時期は12世紀代と思われる。

〔西豊浦地区〕

西豊浦地区も宮ノ元地区・豊浦地区と同様、長尾川右岸の低位段丘上に立地する。小さな谷を隔てて豊浦地区の西側に位置し、宅原遺跡の最西端にある。昭和62年度の調査で、平安時代末期の橋梁状遺構などが見つかっている。

1 トレンチ このトレンチは幅1.5～2mの調査区で、東半で自然の落ち込みを検出し、また西端では須恵器塊・甕等が出土したが、遺構は確認されなかつた。

2 トレンチ L字形に曲がるトレンチである。東西区の西端を一部拡張した。

古墳時代中期 第2遺構面では東西区西端で、溝肩幅3m、深さ40cm前後の断面が緩～後期初め やかなV字形の溝SD 01を検出した。溝底は南から北へ緩やかに傾斜している。

SD 01 埋土は褐色系のシルト層あるいは疊混じりの粘砂土で、杭による護岸は

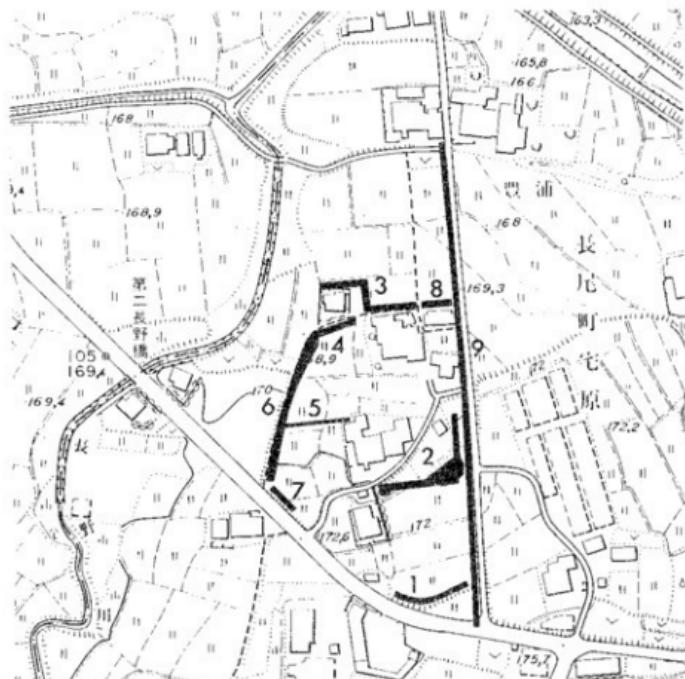


fig. 368 西豊浦地区トレンチ配置図 1 : 2500

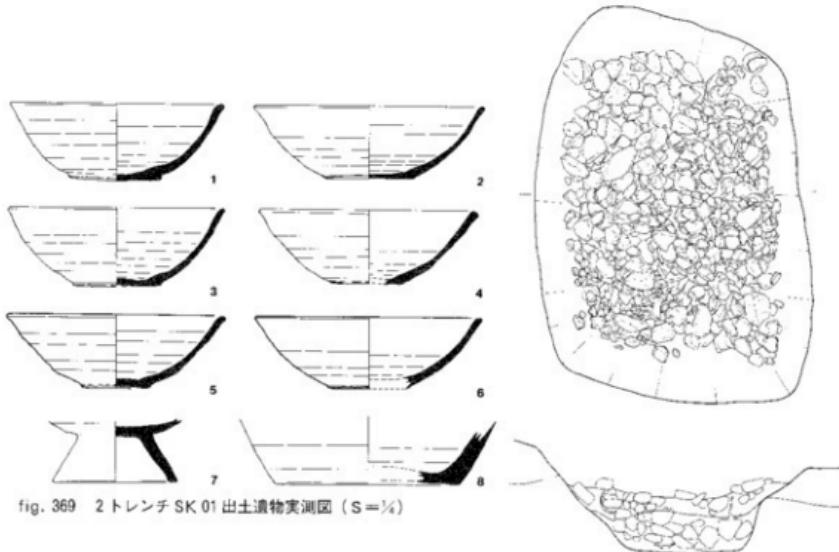
なされていない。出土遺物は溝内埋土の最上層の黄橙色土より6世紀初頭の須恵器壺蓋片が出土している。

この溝は、後述する北方の5・6トレンチの古墳時代の溝SD01につながると考えられるものであり、南方へは尾根を横切るように、東方の谷地形へと向かって延びている。

平安時代後期 この遺構面では、南北区の北半で並行する溝を2条検出した。いずれも幅30cm、深さ約10cmである。遺構内から遺物は出土していないが、包含層より12～13世紀頃の須恵器・土師器片が出土している。

トレンチの屈折部付近では碟の集積がみられたが、土坑状に窪むものではない。12世紀代の須恵器が碟上面より出土している。

SK 01 東西区の西端で検出している。このSK 01は、長辺1.7m、短辺1mの長方形の土坑で、深さは40cmである。埋土の中層で拳大の碟がつまっていた。碟上面はほぼ水平に近いが、わずかに凹面をなす。遺物は碟上面にのっているものと、碟の下になっているものとがあり、碟中にもわずかながら混在している。時期は12世紀前半～中葉と考えられる。

fig. 369 2トレンチSK 01出土遺物実測図 ($S=1/4$)fig. 370 2トレンチSK 01
平面・断面図 ($S=1/25$)

3 トレンチ カギ状に屈折する幅 2 m のトレンチである。

平安時代後期 遺構は西半部分でピットを 9 基検出した。一列に並ぶピットがあるが、

ピット 間隔が 2.5 m と広く、掘立柱建物になる可能性は低い。ピットからの遺物は少なく、いずれも小片で時期を決めがたいが、12 世紀代と考えられる。

古墳時代中期 この中世の遺構面を形成するのが、古墳時代の遺物包含層である。古墳時代後期の土師器の高杯・壺片等が出上している。

一部深掘し、その下層を確認した。深掘部の層序は、上から灰褐色粘性細砂質土（中世ベース層）・黒灰色粘質土・淡灰色強粘質細砂・灰色粘性細砂となる。黒灰色粘質土は後述するように古墳時代の水田耕作土と考えられる。

4 トレンチ このトレンチでは、耕土・床土の下は工事影響レベル下になるため調査は行っていない。そのレベルまでは遺構は存在しなかった。

5 トレンチ 基本層序は、耕土・床土・暗灰色土・明黄色土・乳灰黄色シルト・乳白色シルト・青灰色シルトである。明黄色土の中世遺構面を確認したが、調査範囲内では遺構は存在しなかった。下層では古墳時代の溝 1 条を確認した。

古墳時代中期 青灰色シルト層をベースとして溝を検出した。この溝は 2・6 トレンチ

～後期初め SD 01 につながる溝である。規模は、溝肩幅 5 m 、底面幅 3.4 m 、深さ

SD 01 50 cm で、溝底は平坦に成形され、断面逆台形の溝である。溝内の埋土は大きく 3 層に分かれ、中層には自然木・木葉が多く含まれている。堆積状況や平坦に成形された溝底の形状等は、6 トレンチ SD 01 の状況とよく似ているが、調査範囲内では 6 トレンチのように護岸されていたか不明である。出土遺物は最下層より出土した 5 世紀後半頃の土師器高杯片がある。



fig. 371 5・6 トレンチ第4 遺構面平面図 (S=1/500)

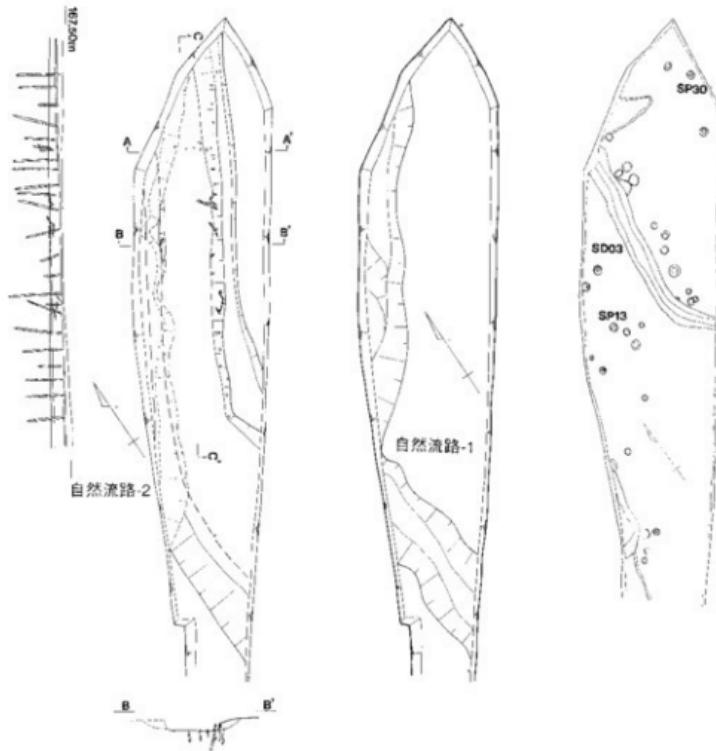


fig. 372 6 トレンチA区第1・2・4 遺構面遺構配置図 (S=1/160)

6 トレンチ このトレンチは、北からA～C区に分けた。基本的な層序は5トレンチと変わらない。遺構面は古墳時代中期～後期初頭3面、中世前期1面の計4面の遺構面が確認された。

古墳時代中期 第4遺構面では6トレンチA区最下層の青灰色シルト層をベースとする
～後期初頭 自然流路3が1条検出されたが、これは調査区西方を北流する長野川から
自然流路3 派生した小流路であると思われる。遺物が出土しておらず時期は不明であるが、SD01がつくられた時期からそれほど遙らない時期に埋没したと考えられる。工事影響レベル以下のため、全掘には至らなかった。

この自然流路が埋没した後に溝SD01が形成される。この溝は2・5トレンチでも検出され、全長80m以上におよぶ溝である。

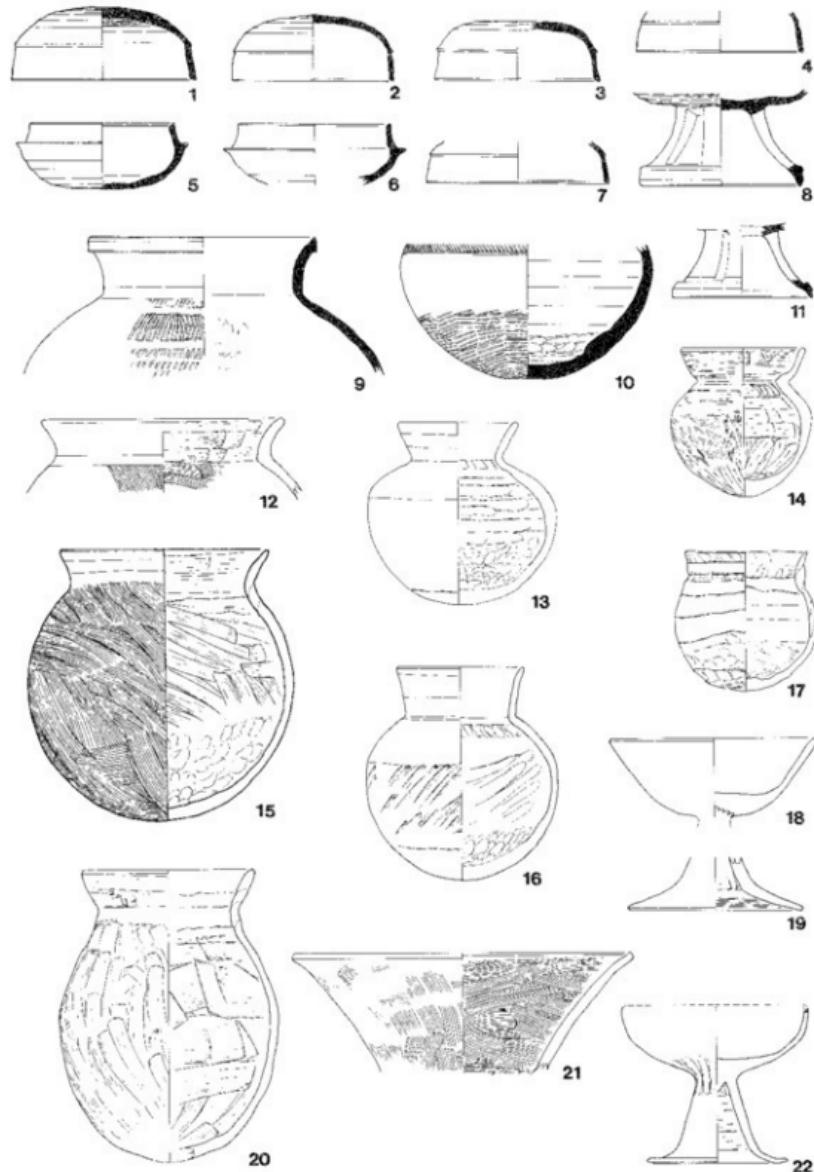


fig. 373 5・6 トレンチ SD 01 出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{4}$)
 1~19: 6 トレンチ中層 20: 6 トレンチ西岸護岸層 21: 5 トレンチ最下層 22: 整地上層

SD 01 SD 01 は自然流路 3 の堆積層と青灰色シルト層をベースに掘形を掘削している。また、自然流路 3 による凹地が存在する調査区の北半では土を埋めて整地を行い、南端で幅約 5 m、北側では幅 2.5 ~ 3 m、深さ 35 cm 前後に掘削している。

護岸 そして、その肩部から 0.5 ~ 1 m 程度内側に入った所に杭を 30 ~ 60 cm 間隔で打ち込んで護岸とし、溝幅 1.6 m に整えている。溝底は平坦で、調査区内の南北端の比高差は 5 cm 以内と緩やかに北に傾斜している。

東岸では調査区 25 m 内に 23 本の杭が存在したが、西岸は上層の自然流路 2 によって削平され、2 本のみが遺存していた。東岸杭列は、わずかに内外交互に打ち込まれており、小枝を杭と杭の間に編むように入れ、この護岸材と肩部の間に小枝や丸木を入れたのち、土を入れて護岸が行われている。

杭材は径 4 ~ 5 cm、長さ 0.5 ~ 1.5 m 以上の丸木杭で、先端を尖らせ、溝底にはほぼ垂直に約 0.2 ~ 1.2 m 打ち込んでいる。

井堰 また、溝内に井堰と思われる溝の流れに直交する杭列を検出した。いずれの杭も上端を欠損しており、溝底下に約 15 ~ 25 cm 打ち込まれた部分しか遺存していない。欠損する部分も多く、詳細な構造は不明である。

溝内の埋土は大きく 3 層に分かれる。最下層は薄い堆積層で、遺物は土師器細片がわずかに出土したのみで、溝の管理がゆきとどいていた時期の堆積層である。中層は自然木・種子・葉等の植物遺体、加工木や土師器、須恵器等が多く出土した。

溝廃絶期の堆積層である。溝廃絶後に堆積した最上層は、ほとんど遺物を含んでいない。

溝の時期は最下層では須恵器の出土を見なかったが、整地土及び護岸土中からの出土遺物や 5 トレンチ SD 01 最下層出土の高坏などから 5 世紀後半ごろに溝がつくられたと考えられる。また、SD 01 中層の出土遺物から 5 世紀末 ~ 6 世紀初頭に廃絶されたと考えられる。



fig. 374 6 トレンチ SD 01 杭列（北西から）（護岸土除去後）

SD 02 6トレンチB区で検出された東西方向の溝である。溝肩幅3m、深さ40cmで、断面が緩やかなV字形の溝で、SD 01にとりつく小水路と思われる。溝内は3層にわかれ、中層には植物遺体が多く含まれていることなどSD 01の状況と同様である。埋土中より杭が出土しておりSD 01のように護岸がなされていた可能性がある。溝底はわずかに東方に傾斜するが、SD 01との比高差から西方に流れていた可能性が高い。

時期決定が行える土器の出土がないため、溝の形状や層位的なことからSD 01と同時期であろうと考えている。

自然流路 2

第3遺構面は、SD 01埋没直後に堆積した乳白色シルト層がベースとなっている。この面では北流する自然流路2が1条検出された。調査区内ではその西岸肩を確認できるのみで、全体の規模は明らかではない。埋土中より須恵器・土師器片が出土している。5世紀末～6世紀初頭のもので、SD 01埋没後まもなくこの流路ができたものと思われる。

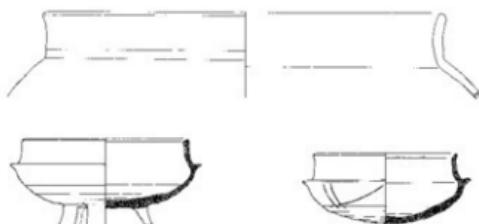


fig. 375 6トレンチ自然流路2出土遺物

自然流路1 第2遺構面は、自然流路2の埋没後に堆積した乳黄灰色シルト層がベースとなっている。この面では自然流路1条が検出された。幅1.8～2.2m、深さ20cm前後で、蛇行しながら北流する小自然流路である。埋土中より須恵器壺身と壺が各1点出土している。これらの出土遺物から6世紀初頭～前半代の時期と考えられる。

遺物包含層

第2遺構面のベースである乳黄灰色シルト層から土師器壺・長頸壺・須恵器壺蓋・壺等、6世紀初頭の遺物が出土している。いずれも完形に近く、あまり磨滅していないことから、付近に当時期の集落の存在が予測される。第1遺構面のベースである明黄色土からも細片の須恵器が出土している。

5トレンチでは同じ明黄色土から6世紀前半の須恵器が出土している。

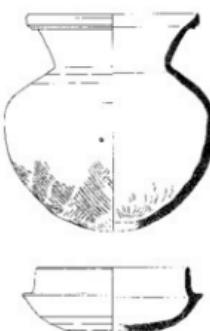


fig. 376 6トレンチ
自然流路1出土遺物実測図
(S=1/4)

平安時代後期 第1遺構面は明黄色土がベースとなっている。遺構はA区のみ検出でき、B・C区では存在しなかった。

SD 03 上面幅50cm、深さ25cmの断面U字形の東西に走る素掘りの溝である。溝底は東から西へ緩やかに傾斜している。須恵器・土師器の細片が出土している。

ピット群 第1遺構面では30基のピットが検出された。ピットや遺物包含層の出土遺物から、そのほとんどが平安時代後期（12世紀前半～中頃）のものと考えられる。SP 13は掘形径25cm、深さ32cm、柱痕径12cmで、木製基礎盤が確認された柱穴である。柱を抜き取ったあとに埋め戻したのち、須恵器塊3個を重ね、その上に人頭大の石を置いている。出土遺物から12世紀前半代のものと考えられる。SP 30においても、柱抜き取り後に土師器小皿1枚が納められている。いずれも地鎮に関するものと考えられるが、調査区内では建物としてまとまらなかった。



fig. 377 6トレンチ
SP 13遺物出土状況

7トレンチ このトレンチでは、明黄色土の中世遺構面を検出したところで工事影響レベルに達したため、そのレベル以下の調査は行わなかった。調査範囲内での遺構は検出されなかったが、遺物包含層より12世紀代の須恵器塊・鉢片とともに、6世紀前半代の須恵器坏身片も出土している。

8トレンチ 層序は他の調査区と同様である。調査は工事影響レベルまでしか行わず、黄灰色シルト層の中世遺構面を確認したにとどまり、遺構は検出されなかつた。当調査区は谷地形上にあるが、遺物包含層からは中世前期の遺物が出土した。近接する他のトレンチの状況から、調査区以外に遺構が存在することは、充分に考えられる。そして、遺物包含層出土の遺物の中には奈良時代の須恵器が出土しており、付近に当期の遺構の存在が想定される。

9 トレンチ このトレンチは、現在供用されている道路敷下に水道埋設工事が行われたため、立会調査を実施した。工事掘形は幅 40 ~ 60 cm、全長 170 m であり、掘削レベルは北端で 1.7 m、南端では 0.8 m である。北から I 区～ VI 区に分けた。

I 区は道場町から西脇市方面に抜ける旧街道がすぐ北側を通る地点である。農業用水路や消防用水設置時にかなりの搅乱を受けており、遺構・遺物ともに出土しなかった。

II 区では中世遺構面である明黄色土が確認され、以下暗褐色土・乳白色シルト・明黄橙色シルト・淡青灰色シルトとなり、3・5・6 トレンチの状況とはほぼ同様となる。但し、厚さ 10 ~ 20 cm で水平堆積する暗褐色土は III 区まで続き、3 トレンチでも確認することができる。今年度妙見山麓遺跡調査会が 3 トレンチの西側で調査を実施し、この層が古墳時代の水田耕作土であることが確認されている。これらの状況から、6 トレンチの北側の沖積地に、水田が営まれていたことがうかがえる。II 区ではこの暗褐色土を切り込んで幅 3 m の溝が存在する。

III 区では明黄色土をベースとするピット 1 基・溝 1 条を確認した。ピットから須恵器塊片が出土している。各トレンチの状況と同様、12 世紀代の遺構が周辺に存在すると思われる。

IV・V 区では橙黄色軟岩盤を確認した。南東方向より延びる尾根先端部分と思われるが、この上面での遺構は検出されなかった。現道路において削平されていると思われる。尾根上から谷地形に向かっての疊まじりの褐色土の堆積層は、2 トレンチ C 区の状況と同様である。この土層上面で 12 世紀代の須恵器鉢片が出土した。

VI 地点以南は掘削レベルが遺構面まで達しておらず、道路敷盛土層のみであった。

3.まとめ 宮ノ元地区は昭和 61 年度の調査で木彫面等公的な祭祀にともなう遺物が出土した 7 世紀の溝が見つかり、昭和 61・62 年度の調査で 7 世紀代の堅穴住居、掘立柱建物、8 世紀代の掘立柱建物、12 世紀中頃の掘立柱建物が発見されている。

今回の調査地においても同時期の遺構が見つかっており、宮ノ元地区的遺構の存在する中心的な時期がほぼ確定できた。7 世紀の前半には堅穴住居と掘立柱建物が存在し、8 世紀代には掘立柱建物だけが存在する。また、これまでの調査で発見されている、木彫面等の公的な祭祀・儀礼にともなう遺物や、今回の調査で発見された 2 点の円面鏡など、公的機関が存在していたと想定される。

豊浦地区 豊浦地区では、有舌尖頭器・石鎌・石匙などが出土し、縄文時代早期～前期までさかのほる遺跡である可能性が出てきたことがあげられる。土器の出土ではなく、石器も包含層からの出土で詳細は不明であるが、この時代の遺構が今後発見される可能性は高い。

6世紀前半の遺構は12トレンチSD 01だけであるが、これまで長尾川右岸の地区では、1kmほど東に離れた辻垣内地区で見つかっているだけである。このように古墳時代の宅原遺跡の変遷を知る上で、今回の調査は重要であり、今後同時期の集落の発見も予想される。

6世紀後半の遺構としては、1トレンチSB 01～04、2トレンチSB 301、SX 301～303、6トレンチSD 02等がある。同時期の集落は宅原遺跡内では長尾川を挟んで対岸の有井地区で見つかっている。また、6トレンチSD 02で出土した皮袋形提瓶は市内では3例目の発見である。

2トレンチSB 301・SX 301・302はそれに続く6世紀末のもので、宅原遺跡内で初めて確認された時期の遺構である。SX 303はこれに続く7世紀前半のもので、この時期の遺構は岡下地区から豊浦地区にかけて集中し検出されている。

7世紀～8世紀代は宮ノ元地区同様、古代の地方官衙の可能性がある。また、集落と公的施設の関係を知る上でも重要な。

9トレンチでは柱穴とその中に埋められていた転用硯が見つかっているが、これらは昭和62年度調査で出土した「五十戸口」「郷長」などの墨書き器と共に郷衙に関係するものと考えられる。

平安時代後期の遺構として、1トレンチST 01、10トレンチST 01はいずれも12世紀代の墓址で、輸入陶磁の白磁碗を副葬している。また、10トレンチ南側の12トレンチでは掘立柱建物が2棟検出され、これらは10トレンチST 01と同時期のものと考えられ、墓と建物との関係など当時の墓制を知る上で貴重な資料となる。

中世末期の遺構として、2トレンチ第1遺構面の遺構がある。このうち、SB 101は、床間の3部屋を1列に配置するいわゆる「摺丹型」の民家である。この形態の民家は村落内の上級農民層の家に用いられたものである。欄を隔てて東側にあるSB 102・103は上杉本『洛中洛外図屏風』などに描かれている下人・所従（げにん・しょじゅう=後の小作人）の家と同様の形態をしている。以上のことから、SB 101は名主（みょうしゅ=後の本百姓）の住居で、SB 102・103はそれに隸属する下人・所従の住居と考えられ、これらの遺構群は当時の農業経営の1単位を示していると考えられる。

近世中頃の遺構は、12トレンチで掘立柱建物と排水浄化施設が検出され、当時の農村での人々の生活の一部を知ることができる。

西豊浦地区 西豊浦地区では古墳時代中期後半～後期初頭にかけての溝と、12世紀前半～中頃の遺構が検出された。

古墳時代の溝では、杭列・護岸・井堰が見つかった。この溝は井堰が存在することから、水田に水を引くための灌漑用水路と考えられ、当時の用水法・土木技術を知る上でも重要である。

今回の調査地内では明らかな水田は検出されなかつたが、6トレンチのすぐ北側の、妙見山麓遺跡調査会が調査した地点では、この溝に伴うと思われる水田が見つかっている。また、3・9トレンチで水田の耕作土らしき土層も確認されている。これらのことから、この溝に伴う水田は、北側と西側に広がっていると考えられる。また、溝内やその上の堆積土中出土の遺物から付近にこの時期の集落の存在が考えられる。

中世前半期の遺構として、集石土坑と、掘立柱建物の一部と考えられる柱穴等が見つかった。このことによって、この時期の遺構は宅原遺跡全体に広がることが確認され、莊園制下における集落景観を復元する上で、重要な資料となる。

以上のように、宅原遺跡はこれまでの調査も含めて、古代から現代に至るまでの人々の足跡をたどることのできる貴重な遺跡であることがわかる。

えいばら
27. 宅原遺跡 岡地区

1. はじめに

今回の調査は、道路建設に伴う墓地の移転地確保のためのものである。墓地移転予定地は宅原遺跡の範囲内にあるため、試掘調査を実施したところ、平安～鎌倉時代の遺構・遺物の存在することが確認された。このため、墓地造成工事により破損する部分を対象として全面調査を実施した。



fig. 378
調査地位位置図
1 : 5000

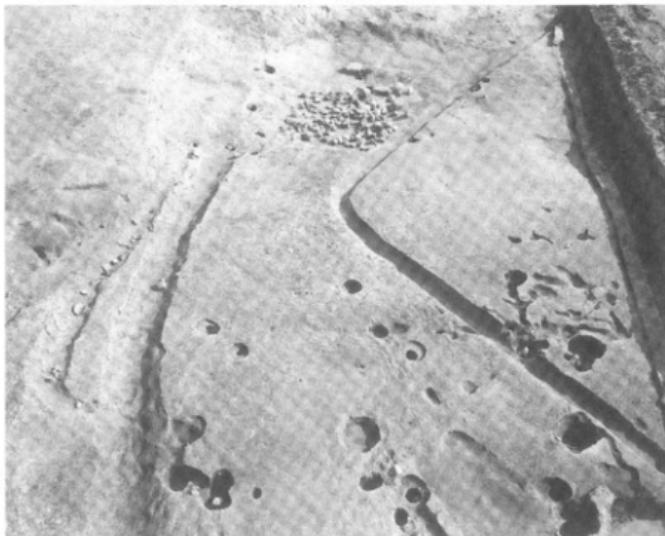


fig. 379
遺構検出状況
(北から)

2. 調査の概要　調査地は、丘陵裾部の比較的ゆるやかな斜面である。その斜面の丘陵側は水田開発時に削平を受け、土坑・柱穴がわずかに残されているのみであった。斜面の低い部分は遺物包含層が厚く遺存し、遺構も比較的良好な状態で出土した。

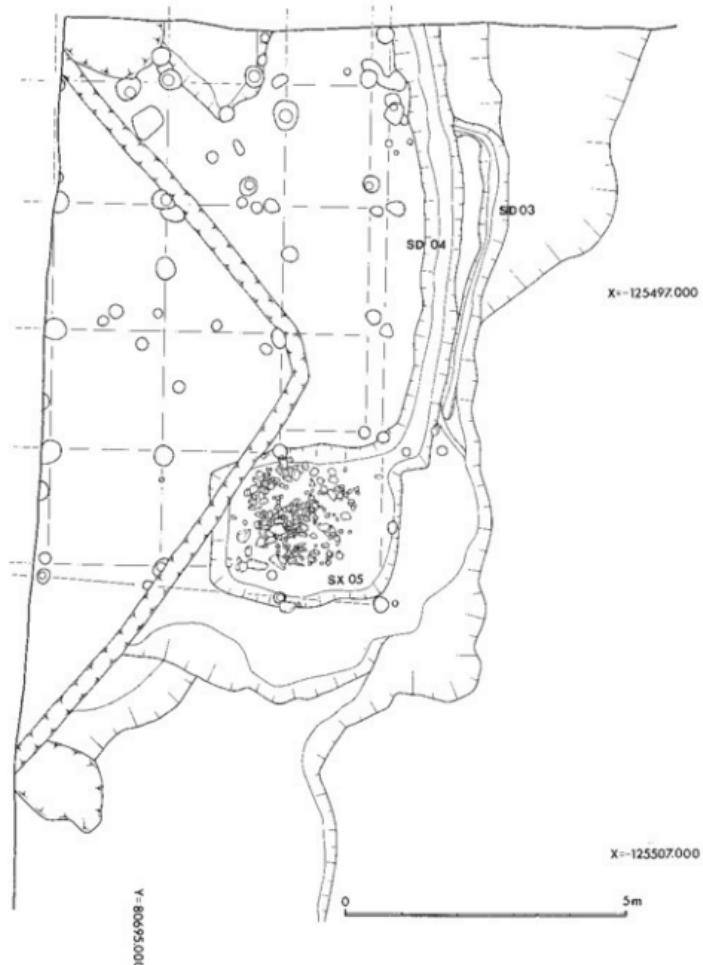


fig. 380 出土遺構平面図

遺構

出土遺構の主体となるものは掘立柱建物であるが、屋敷地は斜面の上方を 60 cm 程度切り込み、平坦面を作り出している。掘立柱建物は東西 3 間以上、南北 4 間以上で、東南隅の柱が存在しない。また、周囲は塀ないしは、縁側が設けられていたらしく、建物にはほぼ平行に柱穴が存在する。

東南隅の欠けた 1 間部分には、底面に敷石のある池状遺構（SX 05）が存在し、それから溝（SD 04）が北に向かってのびる。池状遺構は 2.9 × 3.3 m の長方形で、深さは 10 ~ 15 cm である。底面の敷石は全体に存在せず、ほぼ中央に散在する。溝は池状遺構から北に行くにしたがって、レベルが下がっている。また、この溝に平行に設けられ、途中から合流する溝（SD 03）が存在する。この SD 03 の溝からは、完形の須恵器塊・小皿が数点出土しており単なる排水施設とは考えられない。しかし、SD 04 は池状遺構に接続していることと溝の底面のレベルから排水施設と考えられる。

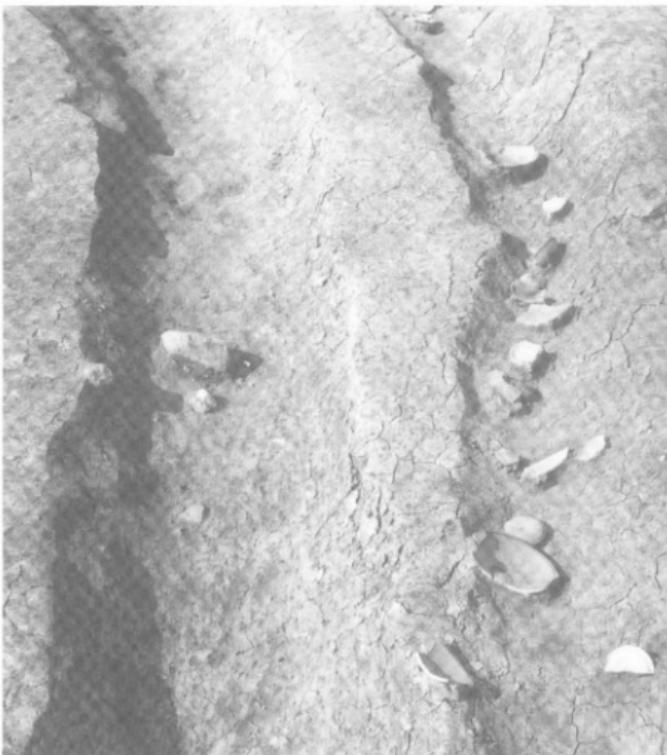


fig. 381
SD 03・04
検出状況（南から）

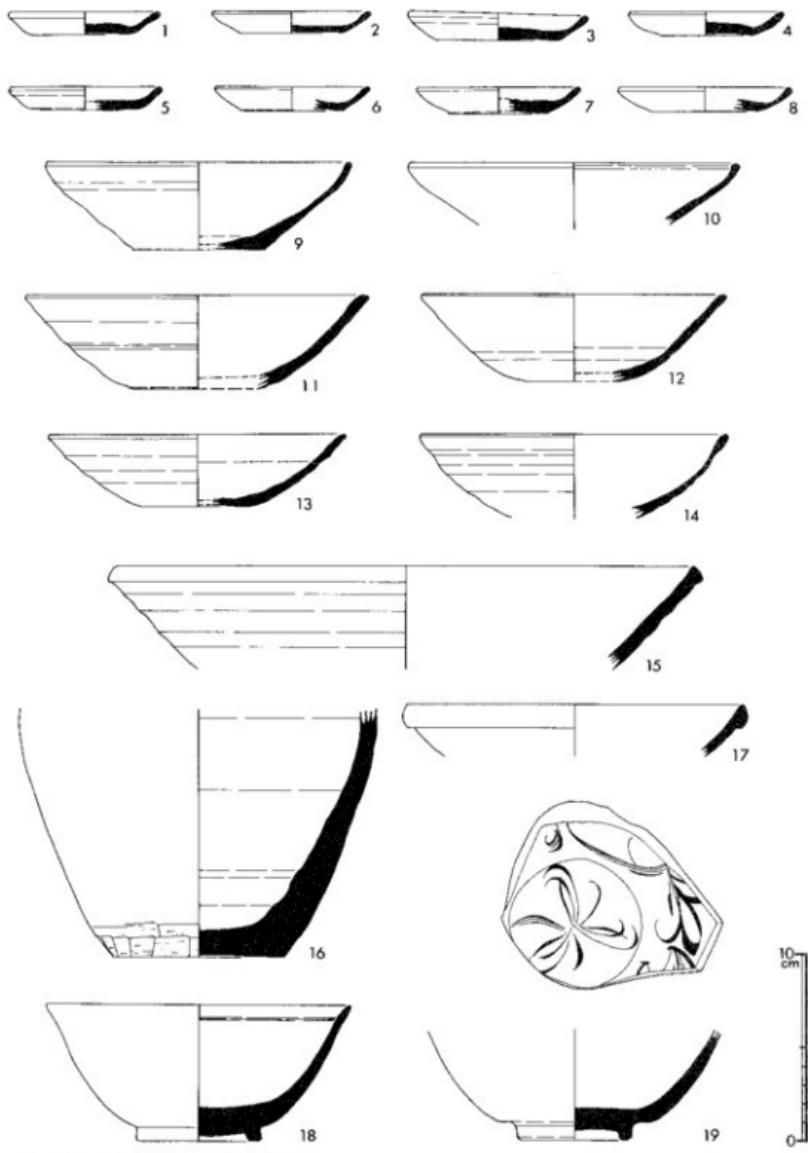


fig. 382 遺物包含腐土遺物実測図

27. 宅原遺跡（周地区）

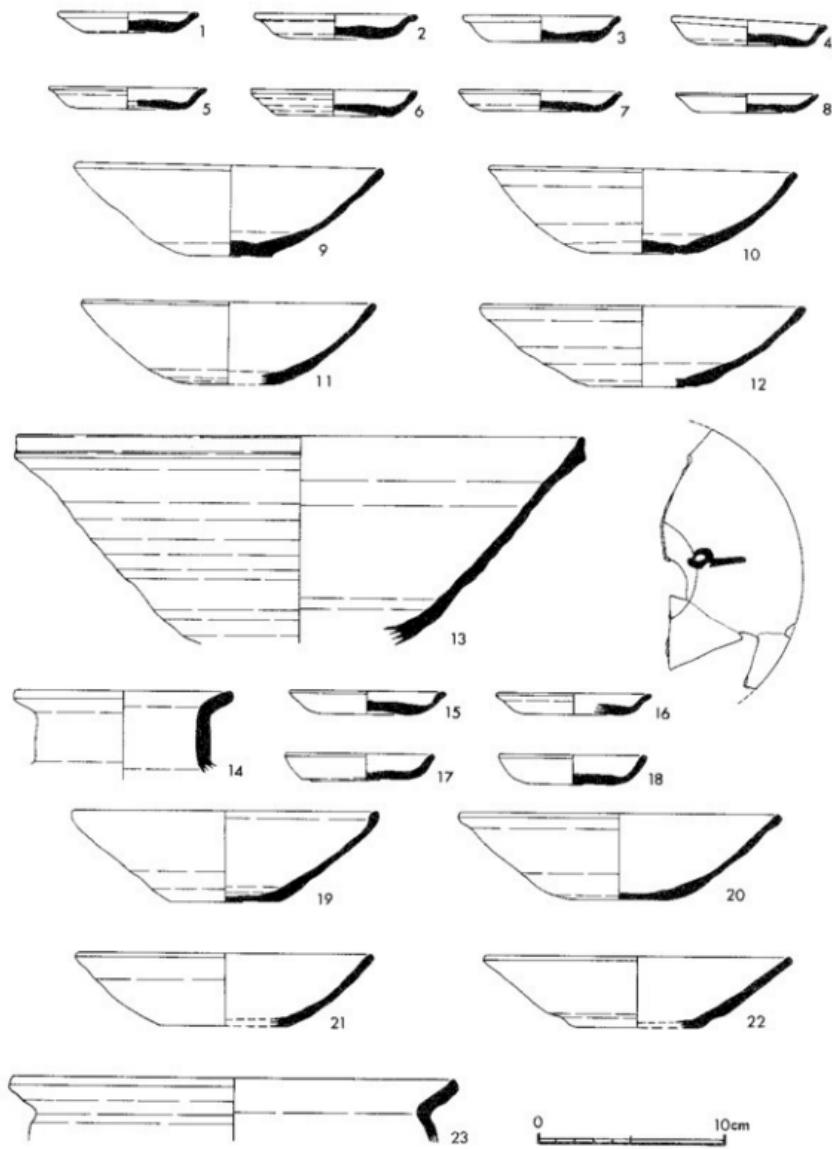


fig. 383 溝出土遺物実測図

1~13 : SD 03 14~23 : SD 04

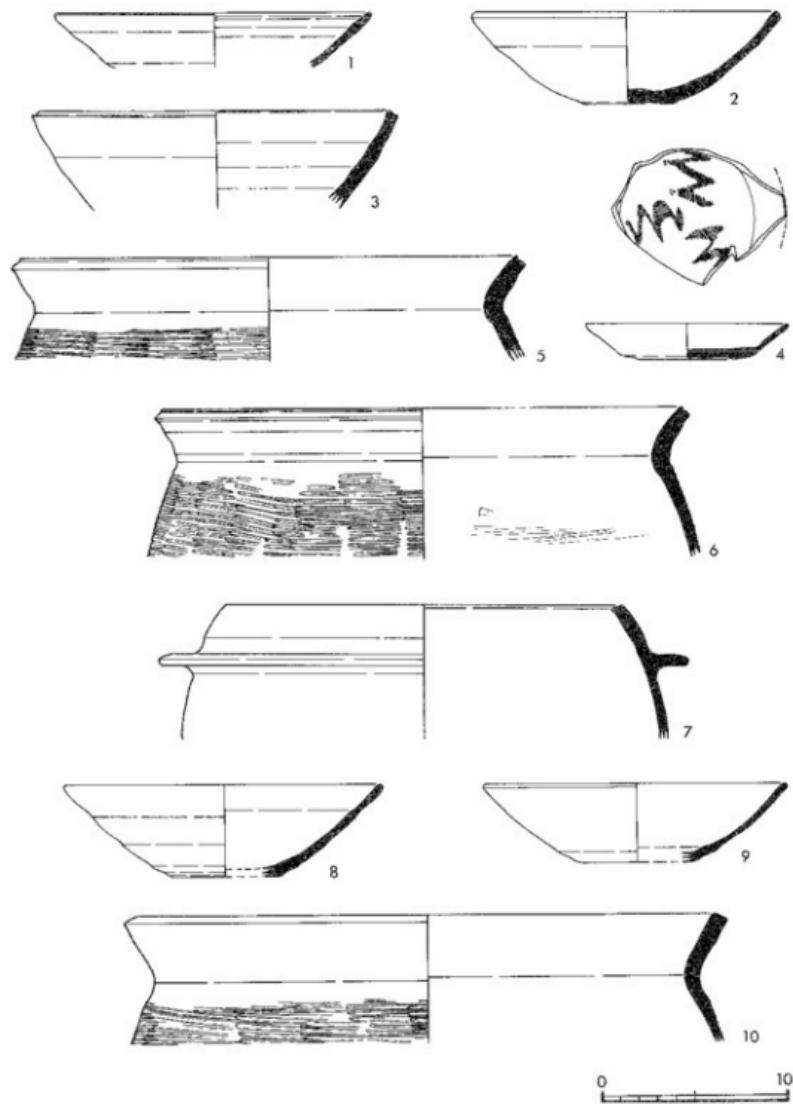


fig. 384 遺構出土遺物実測図(1) 1 : SX 02 2~7 : SX 05 8~10 : SX 06

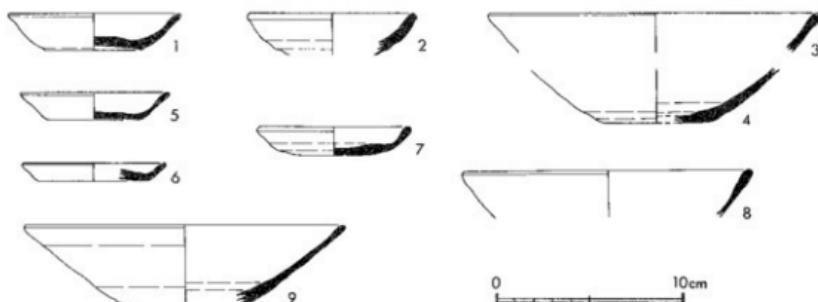


fig. 385 造構出土遺物実測図(2) 1~4 : SX 07 5 : SK 08 6~9 : 柱穴

遺物

出土遺物は、供膳用具が須恵器主体で、土師器・磁器がそれを補い、調理用具は擂鉢が須恵器で、鍋・釜の類が土師器である。

遺物包含層出土の fig. 382-9・10 や SD 04 出土の fig. 383-19 の口縁端部が内弯する須恵器塊や、SD 03・04 出土の口縁部が外反する須恵器小皿 fig. 383-1~5・15・16 は、今日までの付近の調査で出土例がなく、その供給地が他の須恵器とは異なると考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、掘立柱建物 1 棟を確認したにすぎないが、これまでの付近の同時期の掘立柱建物は、段丘上や沖積地の平坦面に建築されているが、今回検出した建物は、丘陵斜面地に建てられている。どのような建物であったかを明らかにすることはできない。屋敷地の構造を知るうえで貴重な資料といえる。

また、造構の存続時期であるが、出土遺物の中心となるのは、12世紀前葉・中葉のもので、その時期に当該掘立柱建物が存在したと考えられる。それを前後する時期の遺物も若干出土しているが、それに伴う造構は明らかでない。

III. 昭和63年度の保存科学処理

昭和63年度に行った、遺構および遺物に対する保存処理作業の概略は、下表のとおりである。以下、その概略を述べるが、このうち、西神ニュータウン内第55号地点2号墳の移設・復元は、株式会社近畿ウレタン工事に委託した事業である。なお、作業全般について、奈良国立文化財研究所の助言・指導を得た。

1. 遺構に関する保存処理

A. 土層転写法 土層転写法は、土層面に樹脂を塗布し、薄く土層を剥がし取ることによって、その土層を保存し、活用しようとする方法である。転写樹脂はトマック NR 51、同 NS 10（商品名）を用いた。両者を対象となる土壤の状態によって使い分けている。

郡家遺跡 御影中町地区において、水田跡から稻株や足跡と推測される痕跡が検出された。この痕跡を保存するために、平面及び断面の土層を転写した。転写したもののうち、畦畔断面については、調査後に建設された御影中学校の体育館内に展示されている。詳細は概報参照（『郡家遺跡御影中町地区第3次調査概報』1990）。

昭和63年度遺構保存処理作業一覧表

| 遺跡名 | 土層転写 | 点数 | 切取り | 点数 | 型取り | 点数 |
|------------------------|-----------------------------------------------------------------|----------------------------------------|----------|----------|-----|----|
| 垂水・日向遺跡第1次 | 基本層序断面 生痕平面 生痕平断面 足跡平面 | 1点 2点 1点 1点 | 足跡 生痕 | 2点 4点 | 足跡 | 1点 |
| 郡家遺跡 御影中町地区 第3次 | 水田平面 ハロー平面 水田畦畔断面 ハロー断面 水田稻株断面 基本層序断面 稻株痕跡平断面 | 2点 2点 1点 1点 2点 1点 1点 | | | | |
| 住吉宮町遺跡 第11次 | 噴砂平断面 噴砂断面 | 1点 2点 | | | | |
| 上小名田遺跡区区 | 木棺底板 柱穴平断面 柱穴断面 | 1点 3点 1点 | | | | |
| 宅原遺跡西豊浦地区 | 溝断面 | 1点 | | | | |
| 西神ニュータウン内 第55号地点2号墳 | | | 埋葬施設 | 1点 | | |

住吉宮町遺跡 慶長年間と推定されている地震による噴砂を検出している。この噴砂を記録するために、立体転写を行った。ここで立体転写と呼ぶのは、遺構の平面と断面を同時に転写することである。この方法により、噴砂を立体的に表現することが可能になった。詳細は報告書参照（『住吉宮町遺跡第11次調査』1990）。

上小名田遺跡 IX区において、平安時代の木棺墓を1基検出している。棺底材が残っていたが、腐朽が進み、部分的に残っている木質部でも厚さ約5mmしかなく、他の部分は木材組織を残していなかった。

從来では、遺物として取り上げることが不可能であったが、平面転写を行うことによって、棺材の平面形を記録し、保存することが可能になった。他にも、平安時代の掘立柱建物の柱穴を立体転写している。

宅原遺跡 古墳時代後期に護岸工事を行った溝の横断面を、転写対象とした。併せて花粉分析も行っているので、その土層の再検討を可能にすることを目的としている。

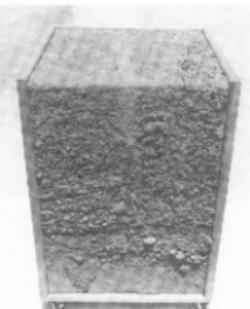


fig. 386 噴砂断面一括転写
(住吉宮町遺跡)



fig. 387 木棺が乾かないようにPEG水溶液を塗る
(上小名田遺跡)

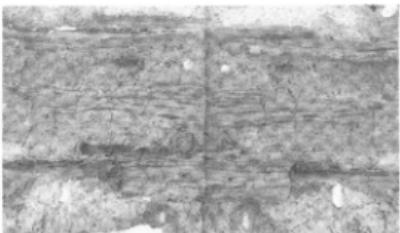


fig. 388 左半分が剥がし取った木棺の痕跡
(上小名田遺跡)



fig. 389 足跡平面転写を巻き取って剥がし取る
(垂水・日向遺跡)



fig. 390 足跡平面型取り 右半分が型取り部分
(垂水・日向遺跡)

垂水日向遺跡 縄文時代の生痕（ここでは貝類などの生物の巣穴のことをいう）を記録するために、その断面の転写を行った。次に、縄文時代の足跡群の平面を $4 \times 6\text{ m}$ の範囲で転写している。これにより、足跡に砂が堆積している状態を記録することができた。さらに、火山灰、花粉、 ^{14}C 、珪藻などの自然科学分析用サンプルを採取した断面を、後に再検討できるように基本層序として転写している。

B. 型取り法 遺構の形状を、硬質発泡ウレタンなどによって型取り、保存、活用しようする方法である。

垂水・日向遺跡 縄文時代の足跡群について、同上的方法で型を取った。まず、足跡に溜まった砂を除いた後、 $4 \times 6\text{ m}$ の範囲の遺構を和紙を用いて保護し、硬質発泡ウレタンを吹き付けて、型を取った。

C. 切り取り法 遺構の一部あるいは遺物を、保存し、活用するための方法の一つで、そのものを硬質発泡ウレタンで梱包して取り上げる方法である。

垂水・日向遺跡 縄文時代の足跡群のうち、 $1 \times 2\text{ m}$ と、 $2 \times 4\text{ m}$ の範囲を切り取った。両者とも、全周を硬質発泡ウレタンと木材で梱包して取り上げた。

取り上げ後、表面の土壌を合成樹脂で硬化している。硬化後、裏面に金属製枠を接着し、台座とした。

同じ方法で、縄文時代の生痕についても、切り取りを行っている。

西神第55号地点 昭和60年度に発掘調査を行った同古墳は、現地保存が困難なため、東2号墳 方約 200 m の縁地公園に移設することに決定した。

方法としては、まず同古墳の埋葬施設のみの型取りをし、合成樹脂で埋葬施設と遺物の復元模型を作る。

次に、埋葬施設を切り取り、移設地に運び、埋め込む。その上に土を盛り、復元墳丘をつくり、その頂上面に見て、触れられるような復元模型を置いている。



fig. 391 切り取る範囲以外を掘り下げる
(西神第55号地点 2号墳)



fig. 392 発泡ウレタンと鋼材で全体を梱包する
(西神第55号地点 2号墳)



fig. 393 クレーン車で吊り上げる 重さ 13トン
(西神第55号地点 2号墳)



fig. 394 トレーラーに積込東方約 200 m の移設地
へ向かう (西神第55号地点 2号墳)



fig. 395 移設地に穴を掘り、元の方位に合わせて据えつけ、コンクリートで固める。発泡ウレタンの表面に FRP (合成樹脂とガラス繊維) を吹きつける(西神第55号地点 2号墳)



fig. 396 埋め込んだ本体の上に土を盛り、新たに墳丘をつくる。頂部に木棺の復元模型を置く (西神第55号地点 2号墳)

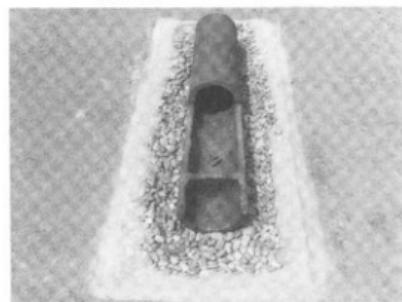


fig. 397 本物の型をもとに墓構を復元し、棺の痕跡から合成樹脂で棺を復元し、遺物も合
成樹脂で復元している
(西神第55号地点 2号墳)



fig. 398 墳丘には一か所階段を設け、その横には
説明板を置いている
(西神第55号地点 2号墳)

2. 遺物に関する保存処理

A. 木製品

昨年度から開始したPEG(ポリエチレンジリコール)含浸処理を引き続き行っている。並行して次回処理予定の木製品の実測図作成、樹種同定作業、各種台帳登録を行い、バック仮保管している。

木製遺物の処理手順



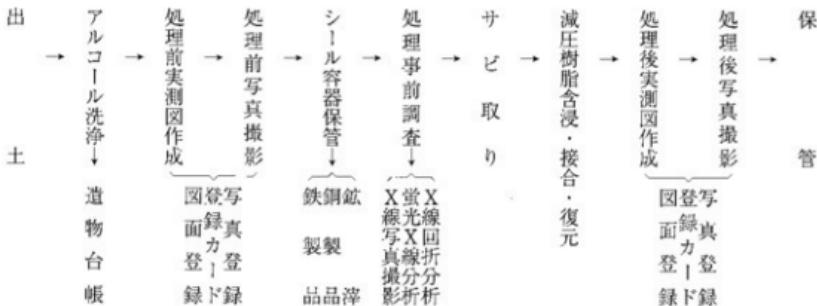
B. 金属器

昨年度に引き続き、これまでに出土した金属器を遺物台帳で確認し、処理前実測図を作成し、各台帳に記入した上で、シール容器梱包を順次行った。その中で、報告書等の作成あるいは現地説明会等によって、緊急に形状などの確認が急がれるものについては、保存処理の事前調査として、X線透過写真撮影などを奈良国立文化財研究所にお願いした。

さらに、鉄製遺物の一部については、サビ取り作業を行い、同研究所の設備で減圧樹脂含浸を行った。

しかし、大半の金属製品は、シリカゲル梱包した上で、シール容器保管の段階に止まっている。

金属製遺物の処理手順



C. その他

動物遺体（骨・歯など）については、アルコール脱水の後、合成樹脂（パラロイドB72の5%溶液）を含浸させて、補強を図り、接合が必要なものはエポキシ系樹脂またはシアノアクリレート系樹脂を用いて接着している。

植物遺体のうち、木の葉については、アルコール脱水の後にキシレン置換し、エポキシ系樹脂を用いてスライドガラス板にはさみ込み封入している。この方法によって上小名田遺跡出土の木の葉について処理を行った。種子については、動物遺体と同様に脱水・置換を経て、合成樹脂を含浸している。



fig. 399 保存処理前の状態（住吉東古墳出土鉄鎌群）

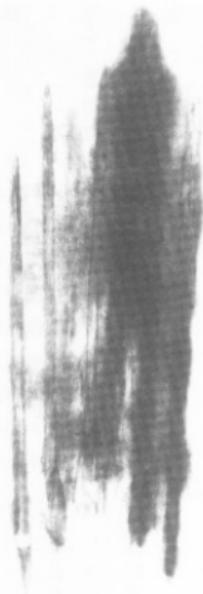


fig. 400 X線透過写真 110 KV-5 mA-3 min (同左)

昭和 63 年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成 6 年 3 月 印刷

平成 6 年 3 月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号
☎ 078 (322) 5798

印 刷 (有) 了 口 工 印 刷
神戸市中央区中町 2 丁目 3 番 8 号
☎ 078 (371) 3831

広報印刷物登録・平成 5 年度 第 337 号 A-6 類 頒価 ¥ 2,000.-